

引返して、漸く町と、四辻と、停車場の位置とが段々飲み込めて来たが、暫く経つた後には、『今晚は——』
と言つて明るい硝子戸をあけて、お園はその旅舎へと入つて行つてゐた。

『おや、お前さんかえ。めづらしいね。』

かう言つて上さんは迎へて、

『何うしたの？ 何處かへ行つて来たの？』

『山からの歸りですの。』

『さう？ さつきの汽車で来たのかえ？』

『いゝえ、少しわけがあつて、川をわたつて今来たばかりなんですの？ 今夜はお上さん歸るにはお

そいわね。』

『もう、今からぢや——』

上さんは後の時計を振返つて見て、『もう九時になるよ。』

『ぢや、明日早く歸ることにしませう。今夜はゆつくり泊めて貰つて。』

『それが好いよ。』

『あゝあゝくたびれた——』かう言つて思はずお園は溜息をついた。

『それで、何うしたえ旦那は？』

いくらか事情を知つてゐる上さんは、かう同情するやうにして訊いた。

『駄目よ、もうあんな男なんか。うんと喧嘩して来てやつた。』

『矢張、ゐるのかえ？ 山に？』

『えゝえゝもうしやうがないの。すつかりもうあきらめちやつた。お上さん、男ツて、薄情なものね。』

川に飛込まうとした話だけは除いて、あとは山のことやら、女のことやら、歸りは夜になつて學校の先生と一緒に来た話などをお園がすると、上さんはそれに心から同情するやうに、『本當だよ。さうした男をいつまで思つてゐたつてしやうがないよ。却つて、一思ひに切れて了ふ方がお前さんの爲めになつたかも知れないよ。運は何處にあるかわからないからね。』

『本當ですとも……』

此前来て泊つた室とは違つた、奥の六疊に案内して呉れたので、まア、兎に角、今夜だけは緩くり休まうと思つて、心持よく一風呂浴びて来た身を、逸早く女中の敷いて呉れた蒲團の上へと横へた。

お園はこの前此處に来て、右にも左にも行く路がなく、殆ど行詰つて了つた時のことを考へずにはゐられなかつた。もうあの時から、否、もつと以前から、旦那の方の脈はあがつて了つてゐたのである。とても駄目であつたのである。それを知らずに、電報を二度も三度も打つたり何かした許りではなく、河ぞひの旅舎に行つてからも、あれほど深く男に憧れてゐた愚かさが、または昔からもよく朋輩に言は

れた男への『惚れつぼさ』が、またさうした純な惚れッほい心を無残に踏みにじつて何とも思はない男に對する呪ひが、思ふまいとしてもまた思ひ出されて来て、（これからは思ふさま男に薄情にしてやらうか。あの朋輩のお咲といふ年増のやうに、男を蹂躪つてやらうか。）などとも思つた。しかし、心も體も疲れてゐるお園は、いつかこの他郷の旅舎の柔かな夜着の中に埋められるやうにしてぐつすり寢込んで了つた。

六十九

河ぞひの旅舎に歸つて来て見ると、こゝでも二三日の中に種々なことがあつたのに驚かすにはお園にはゐられなかつた。ある事件のためにお光はもう其處にゐなかつた。『え？ お光ちゃん、もうゐないんですか。』かう眼を見るやうにしてお園は言つた。

それは本當であるか何だかわからないけれども、お園の出かけて行つた夜だといふ、土地の豪農の息子の蒲團の下に置いた五六十圓入つた財布がなくなつて、始めはその嫌疑が親類の娘つ子にかゝつたが、いろくなことから、段々お光があやしいといふことになつて、最後は、駐在所の巡査までやつて来て大騒ぎをした結果、一度とられた財布は、やがて厠の窓の外から発見されたが、それやこれやで、お光はたうとうゐられなくなつて、そして自分からひまを取つて行つたといふことであつた。

『私、すっかり疑られたのよ。本當にあきれちやつた、あのお光ちゃんにも……。そら、Fさんぢやなしに、向うに男があるでせう。あの人に貢ぐつもりか何かで、ふとさういふ氣がきざしたと見えるのよ。それなのに、私だって言ふんで、それはひどい目に逢つちやつた。あとでは、お錢が出たから好いやうなもの……。』

かう親類の娘は話してきかせた。

『そして何うしたの？ お光ちゃん？』

『まだゐるでせう、そこらに？』

『國に歸つたんぢやないの？』

『國には歸れないでせう。Fさんもゐるし、あの男もゐるんでの。』

つゞいて娘はお園の耳に口を寄せるやうにして、『それに、これなのよ、あの人。』お腹が大きくなつてゐるといふ恰好を見せて見た。

『うそだらう。』

『本當よ。』

『何うして知つてるの。』

『何うしてッてさうなのよ……。それやこれやでお錢が要るのよ。それで、盗る氣になつたらしいよ。』

『ぢや、その子は誰の子？ Fさんの？ 向うの人の？』

『向うの人のらしいよ。でも、何方だかわからないけれども。』

『Fさん、何うして？』

『Fさんも此間のことぢや呆れてゐたよ。そんな女だとは思つてゐなかつたなんて言つてゐたよ。もうあきらめたでせう。俺も役所に出てるお役人だからな。そんな女にいつまで思ひを残しちやゐられないつて言つてゐたよ。』

『本當かしら？』

『そんなことをしたといふのが……』

『あゝ……』

『それや本當よ。お巡りさんが來てから、顔の色が變つちやつたんだもの。そしてそれから暫く經つと、お錢が出たんだもの。便所の蔭なんか前にいく度もさがしてなかつたところなんだもの。取つて見たけれども、持切れなくなつて、そしてそこに捨てたのね。親方もお上さんも皆な怒つてゐたよ。家の名前に疵がつくつて……』

『で、今、何處にゐるの。ゐるところ、知つて……？』

『何でも、その男の指金だらう。M屋にゐるつていふ話よ。』

『へえ。』

お園もかう言はずにはゐられなかつた。M屋と言へば、此の旅舎とは、位置も評判もぐつとわるく、女中は皆なだるまだと言はれてゐる家である。お園はさうしてゆくりなく沈淪して行く朋輩が可哀相なやうな氣がした。

七十

お園の前にはまた以前のやうな生活が來た。朝は早く起き、掃除をし、拭掃除をし、客が來れば、井戸流して洗物をしてゐた手を前垂で拭いて、急いで庭を抜けて座敷に案内するといふやうな生活が、生酔の面倒臭い客の相手にもいやな顔をすることが出來ず、物好きに口説かれる男にも體の好い口を利用して置かなければならないといふやうな生活が、また夜は勞れて自分乍ら自分の體でないやうにぐつすり勞れて眠るやうな生活が——『お光の代りを早く捜さなければならぬ。でなくつちやお園が可哀相だ。』かう主人は頻りに言つたけれども、丁度好い女中は容易に手に入らなかつた。仕方がないので、まだ本當にお客の取扱ひなどの出來ないその親類の娘が半ばお光の代りをした。

山の話を書かれて主人や上さんの前でした時には、『何うも、さうなつちや色戀もお了ひだな……男だつて、薄情ッてばかり言ふのみぢやないんだらうけれど、あとに女が出來ちやな。』かう主人は笑ひなが

ら言つた。夜道を一緒に送つて来て呉れた教員をも主人はよく知つてゐて、『あゝ、あの人、今はあつちに出てゐるのか。數學が出来る好い先生だつた。』などと話した。

お園は不思議にも、此頃は何だか自分の體が大きな運命の流のやうなもの、中に漂つてゐて、急流の瀬に流さるゝでもなく、さりとして淀んだ水の岸に留まつてゐるでもなく、靜かに緩やかに流されるときもななく流れて行つてゐるやうな氣がした。をり／＼はまだ山の旦那に對する未練が起つて来て、われとわが身の愚かさを自ら憤るやうな心持を誘つて來ないこともなかつたけれども、その時はいつもあの夕日に染つた水面と、闇の中の土手と、船橋の畔りの飲食店とが有効にその心を靜めて呉れた。ならないものなるやうにしやうたつてしやうがない。さうしたことを無理にすれば、再びあの苦惱をしなければならぬ。い。か。う。思。つ。て。か。の。女。は。成。る。た。け。そ。の。残。つ。た。心。の。焰。を。勞。働。に。因。つ。て。忘。れ。や。う。と。す。る。や。う。に、一。日。禪。を。外。す。暇。も。な。い。や。う。に。し。て。働。いた。

ある日、裏町のところで、ぱつたりお光に行き逢つた時には、向うでは却つてきまりがわるいやうにして、逸早く行き過ぎやうとするのを引留めて、

『お前さん、本當、お腹が大きいって?』

かう訊くと、

『誰が言つて? さうあのお茶つびいが言つたの?』などと言つてゐたが、好い加減にそれはごまかし

て、却て山の旦那のことなどをお園に訊いた。『しやうがないよ。女が男のために苦勞するのは——私だつてね、それさへなければね、あんなだるま屋なんかに行きやしないんだけど、しやうがないよ。』

『Fさんは何うしたの?』

『あの人だつて、思つてゐて呉れないことはないんだけど……たよりのない人だもの。』

『しかし、本當にしつかりしなくつちや駄目よ。男ツて言ふものは、皆な薄情なもんだから。飽きれば、平氣で捨て、了ふもんだから……。一生懸命になると損だよ。』

『それは知つてゐるけれどもね、それにはまたいろんなことがあるんだもの。』

お光はいつもの快活に似合はずいくらかしよけたやうな顔の表情をして、『で、山の方はもうすつかり駄目なの?』

『駄目さ、もう。』

『よくそれで澄してゐられるね。金でもうんと取つてやつたの?』

『取るどころか、あつたら呉れて来てやりたい位さ、お前さん。』

梅の花の白く午前の光線の中に浮き出してゐる柴垣の角のところで、二人は猶ほ暫く立つて話した。

梅は老いて白くほやけ、桃は紅に土手の下の畠を飾り、青草は鮮かに到る處に萌え、川は緩やかに霞の底に咽んで流れた。土手の上にのほつて振返つて見ても、山の雪は既に半ば消えて、その深い襷の連互をも明らかに眺めることが出来なくなつた。

帆は徐かに霞の中から生れてそしてまた霞の中に消えて行つた。

疎らな樹の栽ゑられた旅舎の庭にも、いつとなく春が来て、沈丁花が咲き、椿が咲き、黄梅が咲き、緋桃が咲き、今は門の入口のところにある絲垂櫻が既に爛な色を見せた。あの西風の寒く吹き荒れた冬は何處へ行つたかと思はれるやうに。またあの辛い朝毎の拭掃除のバケツに涙がほろ／＼と亂れ落ちた冬は何處へ行つたかと思はるゝばかりに――

隠居の朝毎に杖をついて川の水量を見に土手に上つて行く姿も、隠居の上さんが小さな丸指に結つて、家の子供に雜つて、土手沿ひの畠に野蒜や芹やなづ菜を摘んでゐる姿も、または主人の上さんが扮装も構はずせつせと働いてゐるさまも、親類の娘が赤い腰巻をくるとまくつて流元で物を洗つてゐる形も、更にまた客のやつて來たのを迎へて、お園が赤いメリンスの前垂をあたりにはつきり見せながら、「いらつしやい、お客様。」と言つて座敷へと案内する姿も、すべて皆な美しい春の光線と色彩の中に浮び出し

てゐる繪となつた。そしてその添景としては、鶏が五六羽、コ、と言ひながら、矢張麗かな春の日影に浴しながら、四目垣の外にのどかに餌をあさつてゐた。

『そんなことを言つて、Nさん駄目ですよ。』

こんなことを言つて、銚子を取りにばた／＼とその長い廊下を此方に來るお園の姿も艶に見えた。

厨には既に美しい若鮎が繪のやうに並べられ、或は魚でんに、或は天麩羅に、或は酢の物に、命ぜらるゝまゝ、それが客の膳に供せられた。まだ禁漁ではあつたけれども、料理屋でソツと使ふ位は大目に見られて、駐在所の巡查も見て見ない顔をして通つて行つた。

『好い春になりましたね。』

其處でも此處でも、さうした言葉が交された。

静枝がたうとう旦那にも離れ、そこに圍はれ者の化粧品屋の姉にも邪魔にされ、さうかと言つて出たいと思つた東京の方には好い口がなく、止むなく元のK町の古巢へ戻つて行つた時も、穩かな靜かな日で、お園は丁度門の入口のところに出てるたが、それと聞いては、矢張種々なことを思はずにはゐられなかつた。『もう一度稼ぐのよ。だつてしやうがないもの。』こんなことを元氣よく言つて別れては行つたけれど、これも矢張男のためだと思ふと、一人でさびしさうにして土手の上の方へのほつて行くその後姿がいつまでもいつまでも眺められた。

とてもこれからも男なしにはゐられない體であるといふこと、または此方でいくらさう思つてゐても男が決して放つては置かない女の身であるといふこと、それを思つたればこそ、あゝした眞似をする氣にもなつたのであるから、將來はいざ知らず、今の中は成るだけ静かにぢつとして、もう少し本當のことを考へてゐたいとお園は思つてゐたのであるけれども、しかも男は決してそのまゝにかの女をさせては置かなかつた。振放つても振放つても、さうした男心は絶えずかの女の傍に寄つて來ようとした。『私、尼さんになつたんだから……もう、男は斷つたんですよ。』かういふお園の聲は、をり／＼春の麗らかな光線と色彩との中にきこえた。

七十二

執念く纏はりついて來るNの他にも、お園を目ざしてやつて來る飲客はかなりにかつた。一里程離れた村の豪農の息子もあれば、T町の士族町の中で機屋をやつてゐる中年の男は、そこら界限に地機に出して置く機廻りにやつて來た次手に、車を門の中に曳き込んで置いて、午から夕方近くまでお園を相手にして酒を飲んで行つたりした。それに引きかへて、豪農の息子は、まだ女に對して漸く面白味を覺えたばかりで、唄をうたふでもなく、話をするでもなく、何のためにあちよいちよいやつて來るのかと思はれる位でありながら、しかもお園に對して頗る熱い忘れ難い戀心を抱いてゐるらしいのは、はたの目

にもそれとよくわかつた。(あんな息子を手管に乗せるのならわけはない。)かう思ひながらも、お園には、そんなことをするのが、今更馬鹿馬鹿しいやうな、またはさうした純な若い男の心を無條件で、玩具にするのは罪のやうな氣がして、何うしてもその相手になる氣にはなれなかつた。中年の機屋さんに對しても、家には上さんがあり、子供があり、夕暮門口に出てその歸るのを待つてゐるのを思ふと、曾て自分が嘗めた經驗から押して、

『もう、好い加減にしてやめてお歸んなさいよ。お上さんが待つてゐるぢやないの。』かう言つて、單に旅舎の酌婦の言ふ口ではなしに、心からその冗な心と時間と金の浪費とを意見してやるやうな氣になつた。Nのしつこいにはお園はいつも閉口したが、後には、黙つて、放つたらかして、そして此方に來てゐたりした。

其他にも、かの女に寄つて來る男を、いつもかういふ風に、皆な柳に風と軽く受流して、遂にその相手にならうとは思はなかつたが、しかも、お園はある日、ふと困つたことを發見した。それはその前から、變だ、變だとも思ひ、また山に行つて來る前にも、Tが來てゐる時分にも、さう思へばさうした素振がないのではなかつたけれども、しかもそれは自分の思ひやうの故だとばかり打消して、何遍もそのまゝにして了つたことではあつたけれども、それが次第に此頃になつて色濃くなつて來るのをかの女は見遁さなかつた。それと言ふのも、あの學校の教員の話聞いた故ではないか、疑心暗鬼を生じてゐる

爲めではないか。かう思つてまた打消しても、打消しきれない證據が次第に旅舎の主人の態度の上にはあらはれて來てゐるのをお園は見た。

お園はこの頃不思議にも主人の眼が到る處でかの女を見てゐるのを發見した。客の座敷に出てゐる時にも、廊下を膳を運んで通る時にも、または帳場に用があつてそつちへ行く時にも、料理の庖丁を取つてゐる厨の傍を通る時にも——殊に、その厨と勝手を劃る疎い格子のところからぢつと此方を覗くやうにしてゐる主人の眼が、度々其處で働いてゐるお園の眼と逢つた。

(お園は何うした。)

その主人の眼は常にかう言つてかの女を捜してゐるやうに見えた。

時には、平氣ないつもの調子で、

『山から、あの後何とも言つて來ないかえ?』

などと笑ひ乍ら主人は訊いた。しかもその眼の中には、一層かの女に偏つて來つゝある色濃い心があるらはれて見えた。

(これではとてもこの家にもゐられない。)さうはお園には思へなかつたけれども、兎に角困つたことが出來たとお園は思つた。或は、初めてT町の旅舎で顔を合せた時からさういふ氣ではなかつたかとも思つて見た。さうでないにしても、その心の芽はその時既に萌してはゐるのに相違なかつた。お園は不

思議な氣がした。

七十三

その眼がさういふ風にかの女を捜したり、迎へたり、見送つたりしてゐる許りでなく、お園に對して最初から持つてゐた好意好感が、近頃ではそれ以上にある意味と色彩とを持つて來てゐて、此方の出やう如何に由つては、そこにすぐ活きた戀の火がついて來さうにさへ思はれた。

『だつて、それは無理だよ。お園だつて、一人で忙しいんだから。』

かう上さんや隠居に對して辯解して呉れる言葉の裡にも、またはお園のために成るだけ手助けになるやうにしやうとしてゐる行爲の中にも、絶えずやつて來る馴染の飲客に對する批評の中にも、すべてさうした微妙な細かい心が動いてゐて、いつそれが直接にかの女に向つて觸れて來るかわからなかつた。お園は戲談一つでさへ滅多なことは言へないやうな氣がした。

『餘り煩さいことを言ふ奴は、放つたらかして置いて、此方に來てゐる方が好い。家は料理屋なんだから、だるま屋とはわけが違ふんだから。』餘り長く離座敷など行つてゐると、かうしたことを主人はよくお園に言つた。

朝、離座敷の雨戸を明けに行つて、それとなく厨の方に眼を遣ると、そこに、仕かけた仕事の手を留

めて、凝と此方を見てゐる主人の眼にゆくりなく出會つて、慌て、急に畠の方へ眼を遣つたりした。

しかしお園はつとめてそれを避けるやうにした。またつとめてその謎を解かないやうにした。兎に角、さうしたことになつては困るとかの女は思つたからである。またさうしたことになつては、この旅舎にもゐられなくなると思つたからである。お園の身にしては、田舎の旅舎の女中にまで流轉して來てゐるお園の身にしては、また更に山の旦那すらもなくなつて了つてゐる孤獨のかの女の身にしては、さうした思ひを主人からかけられたことは決してわらい氣はしなかつたのではあるけれども、しかも經驗が——上さん持ちの男に懲りた經驗が、十のものなら七つ八つまでその心を押へさせるに與つて力があつた。それはその主人の意志にその身をまかすれば、多少は好いことがあるには相違ないけれども、その結果は矢張同じことであつて、その扮装も構はずに働いてゐる上さんをその相手にして、お互ひに辛い思ひを嘗めなければならぬのにきまつてゐるのである。(何うして男ツて言ふものは、さういふ風に浮氣なんだらう!)ある時は、こんなことを心から考へて、一生懸命に働いてゐる上さんがつくづく氣の毒に思はれるやうなこともあつた。

その癖、お園は教員の杉山からその話を聞いて以來、主人の一舉一動には、常に深い注意を拂つてゐるのであつた。今、主人が何ういふ内部の生活をしてゐるか、何處かに妾でも圍つて置いてゐるのではないか、それともまた近所の町の料理屋の女に深間でもあるのではないか。かう思つて、機會がある度に、つと

めてさうした祕密を嗅ぎ出さうとしてゐるのであつた。しかしあたりの評判では、その杉山の言つた女と切れてからは、主人は眞面目に家業にいそしんでゐるらしく、別にさうした女も他にはないらしかつた。

お園はその矛盾した自分の心を自分でも不思議に思ひながら、成るべく主人から來るさうした優しい、ささやかな、しかも絶えざる壓迫から避けるやうにした。菜の花の黄く日に照された前の畠には、蜂のぶんぶん唸る音がして、終日雌を追ひつかれた牡鶏の時をつくる聲がをりくくのどかにあたりに聞えた。

七十四

呼ばなくつても好いのになんか呼んで見たり、鴨などを拵へてゐる傍を通り懸ると、用でもない用を吩咐けたり、時にはまたほんやりかの女の腰かけてゐる縁側の傍にやつて來て話し懸けたり、見せなくつても好い情を見せたり、上さんばかりではない、他の人達が見ても異様に思はれるやうな素振や調子が次第に日毎に色濃くなつて來るのをお園は見た。

(これほど思つてゐる男の心持がわかりさうなもんだね。)かうその眼が言つてゐることもあれば、(わかつてゐながら汲み取らうとしない情無し女め。)と言つたやうな表情を見せることがあつたり、また怒つたり、脅したり、戯れかゝつたり、遣瀨ない戀心を見せたり、賺して機嫌を取るやうにしたり、いろいろとして見せるのを、お園はつとめて避けるやうにし、またつとめて悟らないやうにし、或時はつよ

く意見するやうな眼色や態度を示したけれども、しかし漸く漲溢して来る男心の壓迫をお園はどうすることも出来なかつた。次第に男の態度は露骨になつて行つた。

ある日の午前であつた。お園は井戸流しのところでせつせつと物を洗つてゐた。と、厨からたもとざるとを持つて出て来た主人は、

『園ちゃん、ちよつと一緒に去つて呉れないか。』

河の中の生洲舟から魚を出して来るから、一緒に行つて手傳つて呉れといふのであつた。お園は笑つて躊躇した。

それにも拘らず、近く寄つて来た主人は、

『そんなものは、あとで好いから、一緒に行つてお呉れ。』

『鶴ちゃんは？』

『鶴吉は何處かへ行つちやつたから。』

『ぢや、お信ちゃんは？』

『まア、行つてお呉れよ。土手の上はのんきで好いぜ。たんほやけんけが一杯咲いてゐるぜ！』まさかそれでも厭だと言ふわけには行かないので、お園は爲方なしに、そのたもを持つてあとからついて行つた。成るだけ主人と二人ゐるやうな處には行かないやうにしてゐたし、またさうしたあぶない

機會を男に與へることを常に避けるやうに心がけてゐたけれども、しかし一緒に毎日顔を見合はせて、一つ家に起臥してゐては、さうして吩咐られた用事をも斷るわけには行かなかつた。それに、土手には、人もゐることだし、まさか理不盡のことをするやうな氣遣ひもあるまい。かう思ひながらお園は二三歩後れて歩いた。

主人はざるを持つたまゝ、駈けるやうにして土手をのほつた。

初めは別に何でもなかつた。いつものやうに、主人は岸から流の中に半ば沈んだやうになつてゐる生洲舟の上に飛んで渡つて、麻裏草履に白足袋、新しい下穿を惜し氣もなくあたりに見せたやうな扮装で、頻りに躍つたりはねたりする鰻や鯉をたもで掬つてはざるに入れ、ざるに入れてはまた掬つてゐたが、やがてそれも十分になつたといふやうに、

『好いか、投るよ。』

かう岸に立つてゐるお園に笑ひかけて言つて、わざとたもをお園に向けて投るやうにした。

『好いか、本當に——』

『好う御座んす。』

正面から本當に投つてよこすかと思ひの外、やがて投られたたもは、お園の立つてゐるところからは二三間離れた方へと飛んで行つて落ちた。お園は急いでそれを拾ひに行つた。そこには蒲公英が黄に簇

がつて美しく咲いてゐた。

七十五

鯉や鰻で満たされたざるを片手に持つて、舟から飛んで岸に上つて來た主人は、やがてお園のたもを
持つて立つてゐる傍へとやつて來た。
ざるを其處に置いたと思ふと、突然主人は眞面目に笑ひかけて、

『いやかね?』

『え?』

お園にはその意味が初めはよくわからなかつたらしく見えた。

『わかつてゐる癖に……。』

お園は急に顔の色を赧くした。長い間豫期した小さな春の風雨はつひにつひにやつて來たのである。
しかし、この場合、お園は決して小娘のやうではなかつた。はつと思つた體と心の衝動をすぐ押へて、

『何でせう?』

としらばくれて見せた。

『いつまで人を吊つて置くもんぢやないよ。ちやんとわかつてる癖に——』主人はかう繰返して、

『好いぢやないか、もう山の方だつてすつかり切れたんだし——』

お園はわざと驚いたやうに、

『まア、旦那、戯談ばかり。』

『戯談ぢやないよ。もうちやんとわかつてゐる筈ぢやないか。本當を言ふと、園ちやんに遇つた時か
らさう思つてゐたんだよ。でも山に旦那があるツて言ふし、無理にツて言ふわけにも行かなかつたから
ね……。男の心も汲んで見るもんだよ。』

『だつて、そんなこと。』

かう言つて巧に戯談のやうにして笑つて、『でも、戯談にでも、さう言つて下さるのは嬉しいわ。』

『戯談ぢやないツて言ふのに——』

『戯談でなければ、猶ほ嬉しいですけどもね。』

かう言つて、益々戯談にして了つて、『だつて、旦那が私のやうなものに、そんなことを仰有る筈はな
らぬもの。』

『お、うぢやないよ、本當だよ、』

『でも……』

『うそと思ふなら、本當だツて言ふことをいつでも見せてやるよ。いろく／＼これでも考へてゐるんだ

からね。もし、園ちやんが言ふことを聞いて呉れば、何處か當分は宅でなしに別のところゐて貰つて、そして一軒料理屋でも始めさせやうとまで思つてゐるんだからね。主人は何處までも眞面目で、何うしても一度思つたことを通さずには置かないといふやうな表情を見せて、戯談にして切り抜けやうとするお園の方に益々深い熱い心を寄せて來た。

暫く黙つて立つてゐるが、急に、お園は笑ひ出した。

『旦那、本當に何うなすつたんですよ。からかつてあとで笑ふ氣なんでせう。いやですよ。』

『まだわからないのかな。』

かう言つて、主人は今思ひ餘つたといふやうに、いきなりお園の傍に寄つて、そのまゝ手を握らうとした。

お園はそれを振放つて遁けは遁けたが、一三步で立留つて、益々可笑しいといふやうにして笑つて見せた。

(しやうがない女だな。)

かう言ふやうにして、主人はまた駆け寄つて來て、今度は肩から手をかけて、すつかり體を羽がひじめにしたが、耳に囁くやうに、

『好いだらっ?』

『だつて、駄目ですよ、そんなこと。』

『何故?』

『だつて、そんなこと出來やしませんよ。わかつてるぢやありませんか?』かう言つて、ソツとやさしく男の手を離して、一三步歩き出して、また崩れるやうにして笑つた。

七十六

始末にいけないといふやうにして主人は黙つて立つて見てゐるが、急に無理に言ふことをきかせやうとするのも得策でないと思ふ。たらし、また、さうした女の態度の中には滿更不可能でない、正面から男を振つたといふ形ではないのを見て取つたらしく、靜かに再びその傍に寄つて來て、

『笑ひ事ぢやないよ。』(しやうがない女だな!)あとの言葉は口に出して言はなかつたけれど、さうした語氣で、爲方がなしに笑ひ懸けると、

『だつて、餘り戯談すぎるわ、旦那。』

『何うして?』

『何うしてつて……』

『まア、しかし、戯談に言つてゐるんぢやないから、よく考へてお呉れ、……今、すぐ返事しなくつ

たツて好いんだから、ゆつくり考へてからでも好いんだから……』

何處までも眞面目な主人は、強い熱い心の要求のすぐ満たされなかつたのにいくらかしよけたといふやうな顔色をして、そのまゝ五六歩、ざるの置いてある土手の草原の方へと戻つて行つた。

お園は笑ひにまぎらせ、戯談にまぎらせて、兎に角その一難關は過ぎたけれども、一方では眞面目であるだけそれだけ情氣た男を氣の毒にも思ひ、また苟くも主人とも言はれるものから、さうした切ない心を遂に遂に打明けられたことを困つたことにも思ひ、それに雜つて、その言ふことを聞きさへすれば、何うにかかうにかかの女の運命に一轉化を來たすことを思ひ、しかもさうなつた曉には、當然繰り返さるべき2と3との苦しい經驗の再び烈しく渦を卷いて來ることを思つた。種々な心が、光景が、瞬時にかの女の頭を掠めて通つた。悲しいやうな淺ましいやうな氣もした。かうして男から男へと移つて行かなければならない身が儂く振返られもした。

お園は泣きたいやうな、笑ひたいやうな變な顔をあたりに見せて、たもを持つたまゝぢつとそこに立つてゐた。

やがて主人は、鰻や鯉のごちやんゝと躍りはねるざるを、短かい天秤棒の折れにかついで此方にやつて來たが、この時には、もうしよけた顔から眞面目な顔になり、その眞面目な顔は、もう再びとさうした言葉を口にすまいといふやうな、またさうしたことを敢て言つたのを後悔するといふやうな顔にな

つてゐるのをお園は見た。お園ももうさつきやうに笑つたり何かすることは出来なかつた。二人はすたゝ歩いた。

土手を越して、今度はうねうねと細く曲折つてついでゐる路を、なづ菜やもち草や蒲公英やけんけに雜つて青く赤く彩られた路を、黙つて下へと下りて來たが、畠の傍を通る時、主人はちよつと振返つて、『本當に、さつき言つたことは、戯談ぢやないからね。好いかえ?』

お園はちよつと困つたやうにして點頭いて見せた。しかもその最後の(好いかえ?)と押すやうに言つた言葉は何となく胸に支へた。男の女に對する強さを何處までも示されたやうな氣がした。

畠から此方に入らうとする處で、

『もう好い。』

かう言つて、主人はお園の手からたもを取らうとした。

『持つて行きますよ。』

『好いよ、好いよ……』かう言つて強ひてそれをお園から取つた。お園はまたさびしい悲しい辛い氣がした。(だつて、それは無理だわ……)こんなことを思ひながら、赧い顔をして、お園は畠から庭の方へ入つて來る柴折戸の前に來た。

はつきりと意志がわかつてからお園は殊にその主人の眼の執念く纏りついて来るのを感じた。それにかの女にしても、もう前のやうに知らぬ顔をしてゐる譯には行かなかつた。それを迎へて脇に外すとか、成るだけ見ないやうにするとか、でなければわざとはしやいで戯談のやうにしてごまかすとか、その何れかを選ばなければならなかつた。時には辛い壓迫を總身に覺えて、何うしたら好いかに迷ふやうにして、眞面目な、暗い、憂鬱な顔をしてゐることなどもあつた。

他人には無論言へなかつた。またそれを話して苦勞をわけて貰ふやうな朋輩もその手近にはゐなかつた。さうかと言つて、上さんや親類の娘などに知れたらそれこそ一層大變である。折角思つて呉れた男に恥辱をかゝせる形になる。それも、本當に厭で、ふつふつ厭で、何うしても相手にすることが出来なといふのなら、さうした態度に出て行くことも止むを得ないことではあるが、さうもかの女は思つてゐないのであつた。何處か嬉しいといふやうな氣もしてゐるのであつた。さうした思ひをかけられないよりも、かけられた方がかの女には好かつたのである。それからまた一方では、さうした數々の経験を嘗めて來てゐるだけに、初心な戀の小娘でないだけに、さうしたジレンマの位置に身が置かれたことをいづから面白いと思ふやうな氣も何處かでしてゐて、靡くともつかず靡かぬともつかないやうな心をこの

まゝある期間持續して保つて行きたいやうな心持もしてゐるのである。さうかと言つて、それは女の浮氣のやうな心でもなかつた。かの女の經歷に、もし、あの身を投げやうとした一齣がなかつたなら、或はさうした心が起らなかつたかも知れないと思はれるやうな心であつた。

しかし男から壓迫して來る熱い心は、かの女をしてさうした中間に留まつてゐることを不可能ならしめる形も十分にあつた。單に面白いなどとばかり、浮氣に、氣輕に思つてゐることは出来ないやうな場合が次第に起つて來た。

『だつて、そんなこと。』

男から迫られる度毎に、さう言つてそれを却けてはゐたが、またさういふ言葉のかけには、いつも上さんのあることを匂はせては置いたが、そんなことでは男は黙つて手を束ねてはゐなかつた。

或は離座敷の雨戸を閉めてゐる時、或は二階の廊下を掃除してゐる時、或は裏の畠で莢豌豆を赤い前垂に摘んでゐる時、或は主人の仕事をしてゐるのを知らずに畠の傍の小屋の前を通つた時、さうした時に、その男の戀心は、時には否味に、時には皮肉に、また時には歎願に、怒りに、訴へに、いろ／＼な形となつてあらはれて來た。

お園はしかし何うすることも出来なかつた。だつて、そんなことといふより以上に、立入つて男の以前の生活をその否定の材料にすることさへ出来なかつた。(だつて、旦那は浮氣なんですもの)とか、(前

に、幾人も女があつたんぢやありませんか)とか、(何うせ、捨てられるんですもの)とか言ふことすら出来なかつた。何故なら、さう此方から突込んで行けば、すぐ引たくられて、引返して來ることが出来なくなる恐れがあるからである。滅多に親しみをすらあらはすことが出来ないほどそれほど男の心は熱かつた。また眞面目だつた。しかしこの熱いのは、眞面目なのは、男が女を手に入れるまでの熱さ、眞面目さで、一度身を任せて了へば、さうしたものは、すぐ冷却して行つて了ふものであることをお園は既に餘りに多く経験した。

七十八

さうかと思ふと、時には不思議なほど得意に、いやにはしゃぐやうな気分にお園はなることがあつた。それと言ふのも、T町で進退維れ谷まつて、漂浪の憂目を感じながら、この河添ひの旅舎にさびしくやつて來た時に比べて、まださう年月も経つてゐないのに、自分ながらも驚かるゝほどの心や境涯や位置の轉換を見たからであつた。もう行詰つたかと思ふと、見えないうところにある運命の神のやうなものゝ、忽然として新しい心や境涯の展開されて行くさまは不思議なやうであつた。口説かれて困つてゐるには相違ないにしても、今ではこの旅舎は、かの女に取つて、辛さびしい、または絶えず主人やら上さんやら朋輩やらから壓されて小さく縮こまつてゐる場所ではなくなつた。主人さへも今はかの女の勢力

の下に來てゐることを考へると、お園はひとり手に微笑まれるやうな気分にならずにはゐられなかつた。かの女が首を縦に振りさへすれば、その旅舎の上さんも、また隠居夫婦も、何うすることも出来ない優越な位置にかの女は今立つてゐるのであつた。もしや夜半に主人がやつて來はしないかと思つて、お園は夜はいつも親類の娘と一緒に寢て貰ふことにして居るけれども、しかも朝起きた時には、晴れ晴れした好い顔色をして、急いで着物を着、帯をしめて勝手の方へ行つた。

しかし、この人知れずにあたりにも漂つてゐる色濃い気分は、そのまゝいつまでも二人の間だけで済まされてはゐなかつた。或はこれがお互ひに既に完全に出來てゐて、それで双方承知して秘密にしてゐるのなら、比較的長く他に勘附かれずゐるたかも知れないけれど、一方は押し、一方は拒ぐ、しかもその拒ぐにも、拒ぎきりではなしに、何處かに押し返すやうな調子があつたがために、その行動はおのづから他に異様に思はせるやうなところが出來て來てゐて、いつとなしに、隠居の上さんが疑ひ、若い娘の養子が疑ひ、次第にそれが上さんにも目をつけらるゝやうになつた。『旦那、本當に駄目ですよ。お上さんに變に思はれるぢやありませんか。』かうある時、やゝ強く、お園は言つたが、さうした空氣は漸く重苦しくなつて行つた。

ある時、それとなく聞くと、『本當にしやうがありやしない。もう大抵懲りてゐるさうなものだのに……。何うしてあゝ若い女が好いんだか。』こんなことを上さんが聞えよがしに言つてゐるのが、ちよつと行き

合はせたお園の耳に入つた。はつと思つて、かの女は急いで其處から引返して來た。そればかりではなかつた。その前から既にお園は上さんから、または隠居の上さんから、娘の養子から、常に疑惑の眼を持つて見られてゐたのであつたが、それはお園自身にもわからないことはなかつたのであつたが、しかも、さうした上さんの言葉をきいてから、一層それがお園にはつきりと觸れ出して來た。(だつて、構ひやしない……。此方は何にもしやしないだもの。清淨潔白なんだもの。疑はれたつて何だつて疑ふ方がわりいんだ……。そんなことは構ひやしない。)まだ堅くしてゐるだけに、さういふ風に公明正大にそれを打消して、何とも思はない顔をしてゐられたけれども、それでも時には、さうしたハメに陥つた旦那が、いくら可哀相になつたり、また可笑しく思はれたり、まだそんなこともしないのに、理由なしに嫉妬を焼く上さんが小憎らしく感じられたりして、何うなつて行くか自分にも分らない潮流の中に、ゆたに、たゆたに漂つてゐるやうな心持がお園にはした。

七十九

その一家の人達の疑惑の眼は次第に壓迫の度を強めて來て、時には餘りわからないのに腹立たしいやうな気分になることもあつたが、ある日は、かうした空氣の中にあるのが面倒臭く、主人の言ふことを聞いて、新しく運命を切り開いたにしたところが、何うせ大したことのあるやうな言ひなどと思つて、いつそこれを切つかけに東京に出て行かうかなど、お園は考へた。

こんなところゐて、田舎の人達を相手にしてゐるよりも、その方がどれ程利口な爲方が知れなかつた。こんな田舎にゐては、將來身を固めるにしても、碌な相手はありやしない。機屋の旦那か、百姓の金持か、でなければ此旅舎の主人の言ふが儘になる位が關の山である。かの女はかう思つて、其日は一日そのことばかり考へてゐた。Tのことなども思ひ出されて來た。(あの人だつて、かういふ時には相談相手になつて呉れても好い筈だ。……何うせ、あの女とは今でも切れてはゐないだらうけれども、その女があつたつて構はない。その位の世話はして呉れるには相違ない。)こんな考へも絶えずお園の頭に往來した。

『本當に、そんな眞似をするから、召使ひが大柄を面をしてゐる。』とか、『そんなにあの女が好いなら、好いやうにちやんとして置くが好いぢやないか。』とか、さうした上さんの言葉は聞くともなく常にお園の耳に入つて來た。従つてこれまでのやうに、單に召使ひとして、愛憎なく使つてゐることは出來なくなつて、何ぞと言つては對抗するやうな態度を常に上さんはお園に示した。さうなると、お園の方でも、矢張人間であるから、これに對して、細かい反抗の形がおのづから心や態度の中に出て來て、ふんといふやうな氣にならぬわけには行かなかつた。亭主が浮氣で、あゝしてなりふり構はず働いてゐる上さんが氣の毒だと最初は思つたやうなこともいつか消えて、今度はあべこべに、(出來た仲でもないのにそん

なに妬く位なら、浮氣をしないやうに亭主をちゃんと自分で縛つて置くやうにしたら好いぢやないか。といふ氣になつた。口説かれた當座には、旦那にはすまないが、疑はれては困るから、一度お上さんによく飲み込むやうに話して置かうとかうやさしく思つたこともないではなかつたけれども、またそれを逸早く打明けて言はなかつたのは、一つは旦那に恥辱をかゝせてはと思ひ、一つはかの女自身にも満更捨て、も了ひたくないやうなところもあつたためであるけれども、今となつては、もうさうした辯解的の言葉は、口から出したくも出なくなつて了つた。(疑ふなら勝手に疑ひなさい。その代り、まごゝくすると、本當に、火をつけて見せて上げますよ。)かうした心の態度で、お園はわざと澄ましたり、すねたりして見せた。

その癖、さうしたことを面倒臭いと思つたかの女は、ある夜、客の用事をすましたあとで、座敷の奥の一間の明いてゐたのを好い幸ひにして、ソツとランプと硯箱とを持つて行つて、東京のTへあてた手紙を書いた。

その手紙には別に深い事情は書かなかつたけれども、その身が非常に困つた境涯にゐるといふこと、何うか今度だけで好いから救けると思つてすぐにも東京に出るやうにして呉れといふことを簡單に書いた。しかし教育とてもないかの女には、それを書くにも、字を忘れたり何かしてかなり長い手間を取つたが、やがて書き終つて、それを封筒に入れて、さつき自分の包の中から骨折つてさがし出して來て

置いたTの宿所を書いた紙片をその帶の間に探つた。

八十

その手紙を出した翌日は、お園はもうその河添ひの旅舎にゐなかつた。その夜遅く、かの女は車に乗せられて、そこから一里半ほど隔つたK町のある料理屋へと送られ、やがてそれにつゞいてそのあとを追ふやうにして、主人はやつて來たが、その一夜を境にして、お園は何うしても主人の言ふことを聞かなければならぬ身になつた。

その料理屋はN屋とは遠くはあるが、いくらか續き合ひになつてゐて、その主人とN屋の主人とは兄弟のやうに交情が好かつた。従つてその主人は心配して、何うかしてさうした關係にならないやうに、お園は確かに引受けるが、さうしたことは思ひとゞまつて貰ふやうに遠廻しに意見したが、張り詰めたN屋の主人は容易にそのいふことには従はなかつた。

それでも、お園に、もつと確乎とした了簡があり、飽まで潔白でるやうとする意思があつたなら、さうした關係にもならずすまふことが出來たであらうが、夥しく上さんに對して腹を立ててゐるかの女は、(さまを見やがれ)と言つてやるために、それが言ひたいばかりに、遂に男に身を任せた。

そのあくる日、N屋の主人が歸つて行つたあとに、お園は明るいおんきな河添ひの旅舎の代りに、さ

びしい暗い町の料理屋を發見した。かの女の一夜泊つた室は、丁度二階の奥の六疊であつたが、障子を明けると、さびしい淡竹の藪があつて、せまこましい裏の野菜畠の隅にお稻荷さんらしい小さな祠の祀つてあるのなどを見た。地機を織る音が、そこからも此處からもチャンカラチャンカラ聞えた。

お園は一日の中に起つた暴風雨のやうな光景を頭に浮べて見た。あの上さんの夜叉のやうになつて怒つた形、厨の瀬戸物の放りつけられて粉微塵に壞れた形、隠居のあの大きな手から血が垂れて流れたさま、あの親類の娘が、何が何だか判らないで、呆氣に取られて見てゐる顔、狂氣のやうになつた主人の表情、さうした凄じい光景は、皆なかの女一人のために起つたと言つても好いのであつた。上さんは何うしても二人の關係を信じて一步も譲らなかつたし、隠居は隠居で、事實のあるなしに拘らず、さうした女中は暇をやるが好いと云ふし、主人は主人で、出来てゐるもしない關係だけに、一層お園のために辯解するし、またその辯解のかけには何うしてもお園を自分のものになければ承知しない意氣込が力強く交つてゐるし、始めは一言二言言つたのが始まりで遂にあつた大活劇を演じたことを、お園は下唇を咬むやうな心持で思ひ浮べて見た、『盗人ただけしいとはお前のことだ……生やさしい蟲も殺さないやうな顔をしてゐるやがつて……』

かう言つた上さんの言葉を耳にしてから、お園は俄かに赫となつたことを思ひ出した。『さうですとも……さうでもないものをさう言ふなら、よう御座んす。立派にさうなつてあけますから。』かう言つて、サツサと此方に出て来ようとするのを、上さんが恐ろしい劍幕で、無理無體に、店の方へつれて行かうとした。伴れて行つて、主人とお園の面皮を皆なの前でむいてやらうとした。そこに、外に出てゐた主人は、急いで飛んで来た。凄じい渦は忽ちそこに捲きあがつた。

お園は夜道を車で送られて此方に来る間、口惜しくつて、口惜しくつて爲方がなかつたことを思ひ出した。何うしても、あの上さんに目を見せてやらなければ業が沸えて爲方がないやうな氣がした。何遍も何遍も體が赫として来たことを思ひ出した。

八十一

お園はまた此處に来たことを思ひ出した。あとを追つて、N屋の主人のやつて来るまで、此處の主人主婦を捉へて、散々上さんの酷いことを言つたことを思ひ出した。しかし、今になつて考へて見ると、何うしてそれから身を任せたか。何うして上さんに意趣返しをすることにのみ心を捉へられて、身を任すことを何とも思はなかつたかといふことを繰返して考へた。

後悔するやうな心持が強くて起つて来るのをお園は感じた。續いて、此處に再び園はれ者の身になつたり、『それ見たことか、あんな立派な口をきいてゐながら、矢張出来てゐたんぢやないか。』と上さんから言はれたりして、いやな嫉妬を身に受けるのを堪へ難い苦痛のやうに思つた。自分ながら何うして昨夜

はあ、馬鹿であつたかとさへ疑はれた。

かの女は何うかして本當の生活をしたいと思つてゐたのではなかつたか。一人の男と一人の女と睦しく暮らすやうな位置になるまでは、身を堅く持つて暮してゐる覺悟ではなかつたか。男から男へと移つて來たこれまでの生活を、あの時きりやめて了ふ筈ではなかつたか。かう思ふと自分ながら、自分のあさはかであつたこと、一時の腹立に夢中になつたこと、人に對する怒りのために自分の大切なものを失つたことなどが、ほんやりながらも、それからそれへと、思ひ出されて來て、下に行つて、家の人達と雜つて話をする氣になれなかつた。

それに、さうした女の弱點に附け込んで、理不盡ではなかつたとは言へ、一面いろ／＼な誘惑に近い甘言を並べ立て、遂にその目的を達した男が憎く呪はれた。本當に思つて呉れるなら、何んなことでもしてやる。一軒立派に料理屋なり何なり拵へて、ちやんと押しも押されもしないやうにしてやる。こんなことをN屋の主人は昨夜も繰返し繰返し言つたけれども、そんなことは當てにして待つてゐられることではなかつた。それにかうした田舎に、氣風も言葉も感情も何も彼も自分にそぐはない他郷に、これから長い間落附いて圍はれて、月二三回の旦那の來訪を待つてなどはとてもゐられないやうな氣がした。しかし、かの女に取つては昨夜のことは止むを得ないことではあつた。あそこまで迫られて、それでも猶それに應じなければ、昨夜の今日と言はず、直に此處から出て行かなければならないやうな、再び去

年の暮の漂浪を繰返さねばならぬやうなハメに陥らなければならぬ位置まで押詰められてゐたのであつた。(何アに、女だもの、その位のことにはしやうがない。)こんな風にも軽く考へてゐた。

お園は悄氣た顔をして、その淡竹の藪に明るく午前の日影のさし込んで來てゐるのを眺めた。

ふと氣がつくとチャンカラチャンカラ地機を織つてゐるのは、其竹藪のすぐ向うの低い屋根の小屋の中であつて、明放した窓からは、櫛卷にした、かの女と同じ位の年恰好の女のせつせと椀を此方にやつたり彼方にやつたりしてゐるのが見えた。あんなにしてゐても、あんなに扮装も構はずに、終日機臺にこびり着いたやうにして働いてゐても、それでも男は亭主一人で、その亭主がまた、その女房や子供のために、他にみめよき女があるのを餘所に、せつせと一日外に出て働いてゐて、夕暮になつて歸つて來て、赤く燃える圍爐裏の火の周圍に楽しく團欒して暮らしてゐるのであると思ふと、自分の生活が、自分の心の生活が、さうした人達よりも一層悲惨な境遇にあるやうな氣がしてつく／＼その身が情なくなつた。思はず涙がほろりと落ちた。

そのK町の料理屋にも、お園は長く落付いてゐられなかつた。それは其處の主人がその状態に同情せず、何處か意見がましいやうなことをN屋の主人に言つたり、お園に對してもいくらか不愉快らしい感

情の眼色を持つてゐたりして、勝手に、自由に、情婦としての女を託して置くことが出来ないやうな形であつたからであつた。

N屋の主人にしては、外形は普通の旅舎乃至料理屋の女中にして置いて、そして自分の情婦であることを完全に好意を持つて承認して呉れるやうなところ、また自分が訪ねて行く時には、半ば客にし、半ば同じ家庭の人のやうにし、一通りの歡樂を恣にしても大目に見て置いて呉れるばかりでなく、更に慾を言へば、かれのゐない時にも、女の監督を間接にして呉れるやうな家が欲しかつた。『お前さへそのつもりなら、その中もつと自由が出来るやうに、ちやんと一軒構へてやるけれども、まア、當分はさうして我慢をして貰はなくちや——』かう言つて、N屋の主人はあれかこれかと、都合の好ささうな場所を心の中で搜した。

一三日経つてやつて来た時には、N屋の主人には、もうその心當りの場所が出来たらしく、『さう十分と言ふわけには行かないけれど、當分あそこで、我慢してゐて呉れ……。此處にゐるよりはそれは好いには好いに違ひないから……。何しろ、此處は、遠い親類つゞきになつてゐるで、主人は好くつても、はたが煩さいからな。』かう言つて一緒に出かけ支度をお園にさせた。

お園には河添ひの旅舎から此處に移つて来たことについてすら、東京のTへあて、やつた手紙の返事のこと気がなつた。T自身出て来るやうなことはないとは思つてゐたけれども、殊によると、あの手

紙の返事さへ寄越さないかも知れないとは思つたけれども、それでも場合に由つては、ひよつくらそこにTが顔を出して来はしないかといふやうにも思はれた。『何だこんなところにあるのか。わざぐあつちまで行つたんだぜ！』かう言つてやつて来ないとも限らなかつた。それは此頃では、身を任せた翌日あたりに比べては、N屋の主人の熱情がいくらか素直に受け入れられるやうになり、また自分の身の位置から言つても、今はその言ふなりになつてゐるより他爲方がないので、そのまゝくつついて行つてゐるけれども、もし、Tに熱情があつて、ひよつくらやつて来て、東京へ一緒に伴れて行つてもやると言ふならば、その方が結句新しい運命がひらけて好いやうにもかの女には思はれてゐた。しかし、もしさういふ人が訪ねて来た時には、(何處其處に行つてゐるから、そこに来るやうに……)とも言ひ置いて行くわけにも行かなかつた。爲方がない、落附いた先に行つてから、もう一度手紙を出すから好い。こんな風にお園は思つた。

その主人や、上さんや、一三日懇意にした女中達は、半ば嘲けるやうな、半ば笑ふやうな、また何處かにさうした年上の男を咬へて行く女を憎むやうな表情をして、かの女とN屋の主人と一緒に車を並べて出て行くのを見送つた。N屋の主人が車に乗らうとする時、此處の主人は、傍に寄つて来て、小聲で、何か頻りに言つたが、それは無論、あまりに深い感傷を意見するための言葉であつた。『うん、よし、よし、わかつた。そんなに心配して呉れなくつても大丈夫だ。』こんなことを言つて、N屋の主人はいく

らか顔をあかくして車に乗った。やがて二臺の車はK町をあとにして走った。

八十三

お園は途中に松原の中に錆びた沼の水光が朝日に輝いてゐるのを見た。また、さびしい村落が雑木林に添つて低く連つてゐるのを見た。白い埃の立つ長い街道に、土地の機屋らしい男が荷車を曳いて行つたり、草鞋脚絆の行商がとほくとさびしさうに歩いて行つたりするのを見た。しかしそこはそんなに遠くはなかつた。一里半も來たと思ふ頃、お園はごたくと五六軒人家の固まつてゐるその向うに、かなり大きな家のあるのを見たが、やがて車はその前で停められた。

それはこゝら附近の機業地の人々が酒を飲みを女を伴つて來たり、泊つて行つたりするやうな半ば旅舎で半ば料理屋の様な家であつた。元はこのすぐ下の處を通つてゐる街道の一驛に、Yといふ遊女町があつて、一時は非常に賑やかに榮えて、鼓や三味線の音が常に絶えない様な處であつたが、ある出來事の爲に、その遊廓がすつかりFの方に引けて了つてからは、全く田園と農村とになつて了つて、今ではもうさうした昔の面影は見る事は出來なくなつたけれども、それでもその移轉の時に、遊女屋から料理屋になつて、一軒そこに踏留つたやうなその家には、昔の空氣を懐しむやうにして客は集つて來るらしく、ちよつと見えては、こんな處でよく家業が出來ると思はれるやうな外觀の淋しいに似合はず、かなり繁昌するといふことであつた。その世離れたさまも、却つてさうした客のために好いといふやうな形もあつた。

それに、K町の料理屋の人達よりは、主人も上さんも、女中達も、皆なさうした事情をよく飲込んでゐて呉れて、始めて行つた時から、(これなら、居られさうだ……)とお園には思へた。上さんは四十一二であるが、ちよつと見ても、前生の粹な稼業がすぐわかるといふやうな人で、N屋の主人に對しても、打解けて戯談口などをきき、お園に向つても、何彼と深切に世話して呉れた。主人もN屋の主人とは交情が殊に好いらしく、商賣の話の中にをりく女の話などを雜へて、酒を飲みながら、打解けて話してゐるのお園は見た。

やがて何の氣なしに、二階にのほつて行つたお園は、(おや!)と思つた。何故なら、矢張、ここにも川があるからであつた。勿論、その川はあのA町にある川のやうに大きくはないけれども、また、その土手も高くはなかつたけれども、その高くないために、折れ曲つた河水のところどころに淡竹や篠竹の藪をあらひながら、さびしく流れてゐる態が美しく眺められた。

そこにゐた女中に、

『この川は、A町にある川とは違ふんでせう。』

お園はかう訊いて見た。

『え、あの川とは違ひます。これはW川です。』

『W川?』

ふと、思ひ附いたやうに、

『ぢや、この下か上かに舟橋のかかつてゐるところがありませんね。』

『舟橋?』と言つて、女中は考へてゐるが、やがて思ひついたらしく、

『あゝ、T町からS町へ行く途中の? あゝ、さうでした。あれは舟橋でしたね。』

『さうすると、此處は、あの上になるんですかね?』

『え、さうです。あそこからは一里位上でせう。』

『さうですか。』

かう言つて、お園は奇遇を感じたやうにして、ぢつとその川を眺めた、闇の中を一緒に歩いて來た病んだ妻を持つた教員のことなどがふと胸に浮んで來た。

八十四

靜かに折れ曲つてゐる川がなつかしいやうにも、またはさびしいやうにも、不思議にかの女の身に纏つて來た。をりく通つて行く白い帆、微かに水を渡つて響いて來る艦の音、春は既に過ぎて、庭石の間には霧島の躑躅が燃え、あたりの綠葉の日に照る光はきら／＼とかゝやき、麥の穂の赤くなつた上に夜

は螢が明滅して飛ぶやうになつたけれども、寒い夕暮に土手に下りて、水に映るさびしい夕焼の空を見た時のことは竟に竟に忘れられなかつた。お園は悲しい氣がした。あの時、死んだ積りで眞面目に働かう、眞面目に生きやうと思つたことが、何うにもならず、矢張、男の玩具具に均しい身の上となつて、かうしてこの同じ川ぞひの田舎に彷徨して、何うなつて行くやらわからないやうな運命の波に漂つてゐるのが悲しく且つ辛かつた。いつになつたら、さうしたきまつた、正しい生活がかの女の前にやつて來るかわからないやうな氣がした。

東京のTからは、何の消息もなかつた。そこから新たに手紙を出さうかと思つたけれど、落ついて考へて見ると、それは却つて其身の愚かしさを男に示すやうにしか思へなかつた。Tだつて、もうかの女のことを何とも思つてゐないに相違なかつた。或はまたTが返事をよこしたにしても、途中で抑留されて此處まではとゞいて來なかつたかも知れなかつた。さびしいさびしい氣がした。

前二階の間から見ると、街道が白くさびしく連つてゐて、それが前も後も際限なく、何處までも何處までも續いてゐるやうな氣がした。何うかすると、旅客がひとりさびしく通つて行くのが見えたりして、故郷戀しさの心に燃えた。

裏の島の中の路を越して、低い土手の上に行つた時には、またしても、川がその身を引くやうにした。何處にいつたとて、變りはない。何處に行つたとて不幸と艱難と不如意とがあるばかりである。其家に

つとめてゐる女中達にしても、一人として男と戀心とに虐まれてゐないものはなく、皆なさうした境遇に表は笑つて裏では泣いてゐるのである。(矢張、あの時思ひ切つて死んだ方が好かつたかも知れない……)かう思ふと、(今だつて出来ないことはない。やらうとさへ思へばすぐだ。)とつゞいて思はれて來て、その靜かに小さな瀬をつくつて流れてゐる水面がちつと見詰められた。

と、微かに山の旦那のことが思ひ出されて來た。此頃ではその時起した嫉妬や戀心はもう遠く離れたやうになつてゐた。二日も三日も全く忘れて了つてゐることもめづらしくはなかつた。それが、不思議にも、微かではあるが、かなり強く思ひ出されて來た。旦那の方にも、無理はあつたが、無情はあつたが、此方にも、全然その責任がないとは言はれないやうに考へられた。嫉妬に目が眩んで、本當に男のことを考へて見る餘地がなかつたのである。打壞さないでも好いものを此方から進んで打壞したやうな形もないではなかつたのである。しかし、今では、もう未練は起つて來なかつた。再び山の旦那を何うのかうのといふ心は少しもなかつた。それがお園には堪らなく深い悲哀を誘つた。

ふと氣が附いて、(いつまでこんな處に立つてゐたつてしやうがない。)かう思つて、お園はそこから引返して來た。淡竹の藪には既に大きくたけた筍が五本も六本もツンツン出てゐて、スカンボと俗にいふ赤い莖の草があたりに繁つてゐた。午前の日影は疎らな林を洩れて、その明るい光線をかの女の肩やら髪やら裾やらに投じた。鱸のギイといふ音が靜かに聞えた。

八十五

そこに來て一週間ほどしたある日の午前のことであつた。矢張その日も好い天氣で、街道には六月の初夏の日影が美しく照りわたつてゐたが、裏の井戸流して洗物をしてゐたお園を朋輩の女中は此方から手招きして、

『ちよいと、ちよいと……』

『何アに——』

お園は振返つて訊いた。

『ちよいと——』猶ほも手招きを留めずに、此方に來なくつては話が出来ないといふやうにして笑ふので、爲方がなしに、洗物をそのままにして、お園がその傍に行くと、

『お前さん、知つてゐるお客様よ。』

『さう——』

平氣を粧つて、かうは言つたものゝ、Tではないかと思ふと、胸が俄に躍り出した。

『何んな人?』

『さうね、髯の生えた、大きな體格をした方よ。』

『いくつ位？』

『さうね、もうそんな若くはない人だよ。』

『さう——』いよくTに相違ないと思ひながらも、わざとそれを面にあらはさずに、

『何うして私を知つてゐるのがわかつたの？』

『だつて、来て、私がお茶を持つてあがると、すぐ、此家に、お園さんて云ふ人がゐるだらう。元、町にゐた——』つてかう言ふんだもの。』

『お前さん、何ッて言つて？』

『ゐるつて言つたわ。』

『さう——』嬉しさが込み上げて来るやうにしたが、それを押へて、わざと平氣な様子をして、『今すぐ行くわ。これを洗ふと……』

かう言つて、再び井戸流しに戻つて来たが、落附いて洗物を續けてゐるわけには行かなかつた。お園は自分ながら不思議に思はれるほど嬉しさを覺えた。あの川の渡して別れた時は、寧ろ男の無情を呪つて、今度來たら、振つて振つて振りつけてやらうと思つたのは、あれは自分かしらと思はれる位であつた。お園はそこ／＼に洗濯の手を留めて、洗つたものだけを物干竿に干すとそのまゝ急いで家の中に入つて行つた。

廊下の鏡の前にちよつと立つて髪を直し、それから着物も着替へたいとは思つたけれど、それよりも一刻も早く逢ひたいやうな氣がするので、そのまゝトントンと階梯を二階に上つて行つて、しかももしや人違ひではないかと一方には危みながら、ソツと覗くやうにして顔を其處に出した。果してTであつた。

『まア！』

かう言つてお園は笑つていそ／＼して室の中に入つて行つた。

しかし、さつきの女中が傍にゐるので、いろ／＼と積る話を押へるやうにして、

『いついらしたの？』

『今來たばかりだよ。』

『昨夜、N屋に泊つたのですか。』

『いや——』

『それぢや、今朝、何處から來たんですの？』

『T町の停車場前に泊つてね。君のことをいろ／＼聞いて來たよ。』

『さう……？』ちよつと途切れて、

『お上さん、知つてゐて？』

今度の事情を知つてゐるか否かをその質問の中に籠めた積りであるが、Tはそれまでは知らぬらしく、『知つてたとも……君があそこからA町に行く時の話なんかしてゐたよ。』

『さう……？』

かう言つてお園はTの顔を凝と見るやうにした。

八十六

女中が下りて行くと、二人の會話の調子はすぐ變つて行つた。

『それで、A町にいらしたんですか。』

『それはさうさ。』

『何か、私のことを言つてゐたでせう？』

『いや、ちよつと午飯を食つただけだから、別に何も込み入つた話なんかしやしないよ。お前がゐなくつちや爲方がないからね。』

『誰が、私がこゝにゐることを教へました？』

かういくら探るやうにしてお園が訊くと、

『あの娘つ子がゐたらう。あの娘が教へて呉れたよ。短い間にも、あゝいふところは變るもんだね。』

お光ちゃんもこれが大きくなつたんだつてね。』

と言つて、腹の大きくなつた手眞似をして見せた。

『え、……』

かう言つてお園は少時黙つた。

Tはすぐ言葉をついで、『實はもつと早く來なけれやならないんだつたけれども……丁度旅に行つてゐてね、四五日前に歸つて來たばかりなものだから、あの手紙も、それまで見なかつたんだからね、それからすぐ來るつもりだつたけれども、一日二日は、暫く留守にして置いたもんだから、用事が溜つてゐてね。これでも早く來ただけれど……』

『さう？ 旅に行つていらしたの？』かうお園はそれで飲み込めたといふ表情をして、『何うしたんだらう？ ぢかにお出でにならなければ、手紙位下すつても好いと思つてゐたんですよ。まさか、貴方がそんな薄情ぢやないと思つてはゐりましたからね。それでも何うかすると、もう私のことなんか、ちつとも思つてゐて下さらないのかと思つて、悲しくなつたこともありましたよ。』かう言つて間を置いて、でも、そんな貴方ぢやないと思つてはゐりましたの。いつか、きつと來て下さるとは思つてゐたにはゐたんですけども……』

『それで、何うしたんだね、一體……？』

『もう好いには好いんですの。一片付き片附いたには片附いたんですの。』

『矢張、それぢや間に合はなかつたわけだね。』

かうTは笑ひながら言つた。

『さういふ譯でもないんですけどもね……。』お園も笑つて、『何うして？ あの方？ 御機嫌好いでせう。』

かう軽く、いくらか嫉妬を見せたやうにしてお園は言つた。

『駄目さ、もう。』

Tも笑つた。

『うそばかり言つてゐる！』

『うそぢやない、本當だよ。』

さういふ言葉のかけにも、その綺麗な女が、自分などはとても何うすることも出来ないその女が、まだ依然として隠されてあるのをお園は見た。お園はまた黙つて了つた。

暫らくしてTは、

『それにしても、何うして、こんなところに来るやうになつたんだね？』

『いろく譯があるんですよ。』かうは言つたものゝ、それを詳しくTに打明けて話さうといふ氣には

お園にはまだなれなかつた。Tがその事情の何事をも知つてゐないらしいのも、それを打明けることを疑ける動機の一つにはなつた。

『でも、あそこで、あの娘が私のことを何か言つてゐたでせう？』

『何だか事情があつたらしいやうな口振ぢやあつたけども、詳しくは言はなかつたよ。此方でも聞きはしなかつたけれど……。』

『さう……。』考へるやうにしてお園は言つた。そこに女中が膳を運んで階梯を上つて来る氣勢がした。

八十七

名物の鯉のあらひが出たり、蕁菜の新しいのが出たりして、酒の酌を女中と二人でしてやつたが、此
前、逢つた時とは違つて、Tがいやに眞面目なことを言ふやうになつたのをお園は見た。勿論、この前
にも、何方かと言へば、眞面目な、洒落などは滅多に言はない方であつたが、しかし今のやうに落附い
て、莞爾して、話でも何でもすんぐ出來るといふ方ではなかつた。女中のゐる前で、訊かるゝまゝ、
山の旦那と切れた話をした時には、『そいつはいかな。何故もつと深切に思つてやらなかつたんだえ。
それぢや、女の嫉妬ばかりで、此方からわざく打壞したやうなもんぢやないか。』此頃お園が考へてゐ
る胸にびたりと思ひ當るやうなことを言つたり、また、男女の心の争鬭の話になつた時には、『兎に角男

にしても、女にしても、お互ひに信じなくては駄目だ。疑つては駄目だ、惚れた女なら、飽までも惚れる。向うが思はうが思ふまいが、一心になつて惚れる。それが本當なんだ。此方さへ眞面目に、本當にしてやれば好いのだ。向うが何んなにうそで固めたやうなことを言はうと、また騙したり、玩弄にしたり、金をまきあけるために、ありもしない情を女が見せたりしても、そんなことには構はずに、此方で本當に思つてやりさへすれば好い。本當に思つてやるつて言ふ心がなくつては、折角、男が女を思ひ、女が男を思つても、結局は壊されて了ふ。つまり折角惚れ合ひ、思ひ合つた仲でも、お互ひに疑つたり、嫉妬を焼いたりして、壊して了ふといふ形になるものだ。』と細かく男女の間の心持を説明してきかせた。と、女中は不意に、

『では、本當に思つてやりさへすれば、その戀は成就するつて言ふんですか。』

『いや、成就する、成就しないぢやない。成就する、成就しないは、二の次ぎで、それより先に、此方から思つてゐるんだから、いつまでも思ふ。向うの相手が、何んなに浮氣をしやうが女を拵へやうが、また女なら男をこしらへやうが、自分だけは思つてやる。思ふことをやめない。捨てられても思つてやる。何故なら、思つたのは、初めから此方が思つたので、その思つたといふ心には、報酬的な意味はない筈であるからである。向うが思はないから、此方もやめる。これは普通の世の中の色戀だが、さうした色戀はさらにあるが、それでは決して本當の戀ではない。本當に、男が女を思ひ、女が男を思つたと

いふことではない。さうした報酬的のところからもつと先に出なければ——。』

『さうですね。』

女中も思ひ當るといふやうにして點頭いてきた。

『考へて見給へ。』かう言つて、Tは盃をちよつと口に當て、『君方が男から男へと移つて行かなければならないやうになるのも、さうした報酬的のところにて捉へられてゐるからです。男が捨てるから、此方も捨てる。これでは際限がない。折角、男を相手にしても、その男の本當の魂まで入つて見たのではなくつて、上つ面な心にちよつと觸つて見た位なものにとまつて了ふ。折角、戀をして見ても、それは残念ぢやないですか。』

『それはさうですね。それが、本當にはちがひありませんね。此方から最初は思つたんだから、此方だけで深切に思つてやりさへすれば好い……。あゝ、好いことを訊いた。本當よ、それは、お園さん。』女中は眞面目になつてかうお園に言つた。

『でも、さういふ男ばかりありませんもの。』

かうお園が言ふと、

『それがいけないのだ。何故、男がさうなら、さういふ男の眼をさまさせてやるといふ眞面目な心持にならないのだ。何故、もつと深く男の魂まで攫まうとしないのだ。男は皆な同じだ。男に違ひはない。』

かう言つたTの聲は説法者のやうに強かつた。

八十八

Tはすぐ言葉をついで、『向うが本當に動いて來ないのは、此方にもそれだけ眞剣なところが無いからで、それを以て、一概に、女なり男なりを非難するわけには行かないよ、何んな男だつて、女の方から本當に一心に動いて行けば、それを玩弄視するものはありやしないからね。皆な同じ人間だもの。』

『本當に、さうですね。』

かうまた女中は眞面目に言つた。

お園は黙つて聞いてゐた。成ほどそれはさうである。好い加減で止して了ふからいけないのである。それなりになつて了ふのである。かう思ふと、自分のこれまでやつて來た男から男へと移つて行つた生活も、それにちやんと當てはめて考へられて來るやうな氣がした。

『僕なんかだつて、その點では、随分辛い、悲しい、また、思ひのまゝにならない火水の中を通つて來たんだからね。いくら、此方から、心を注いでも受けて呉れない。それが皆な水の泡同然になつて了ふ。これではとても駄目だ。徒勞だ。生命の浪費だと思つて、何遍そこから引返して來たかしのれない。しかし、最後には、さうした心、つまり自分さへ思つてやつてゐれば好いといふ犠牲的の心が生れ出して

來たよ。つまりその相手を自分のものにしやうと思つたり焦つたりした心がいつか一轉化して、それがわるいのだ。いくら愛したものだと言つて、體も別だ、心も別だ、男と女との性の違ひもある。草や木でさへ、生のあるものは一本だつて自由にならない。枯れて了つてからでなくては自由になれない。生かして置きたいといくら思つたつて、枯れなければならぬものならば枯れて了ふ。戀だつて矢張さうだ。相手を自分のものにしやうと思ふのが間違つてゐるのだ……。そのため、嫉妬も起り、喧嘩もし、壞さなくつても好いものをも壞して了ふ形になるのだ。だから嫉妬が起つたら、却つて一層向うに深切にしてやるやうにしなければならぬんだよ。』

『さう出来れば好いきまつてゐるんですけどもねえ！』

凡夫の情けなさにはそれが出來ないといふやうな調子で女中が言ふと、お園もそれに合せて、

『本當ですね。さういふことが出来れば、一番それが好いには違ひがないんだけど……』『さういふ貴方さへ、さうは言つても、實行は出來ないんでせう。』といふ顔の表情をして見せて笑つた。

『笑つちや駄目だよ。本當のことを言つてゐるんだよ。君達にも大切なことを言つてゐるんだよ。その證據には、僕の言つてゐることが、皆な君達に思ひ當ることばかりだらう。これでも、僕はこゝまで考へて來るのは、容易なことではなかつたからね。散々女を玩弄具にした揚句、一つの女の魂と打つたつて、それでえらい目を見せられて、うんと苦しんで、憎い奴だ。あいつは生かしては置けない。あい

つの肌に刃を當てるか、でなければすつかり自分のものにするかしなければ生きてゐられない)ッていふやうな境まで通つて來たんだからね。ところが不思議なもんだ。さういふ風に、相手を自分のものにしようといふ心を失くして、唯、向うを愛する、自分が愛さなければならぬものだから愛する。かういふ態度に出て行くと、お互ひに、お互ひの心持がよく解つて來るものだよ。さうした男に、薄情の刃を猶ほも當てる女は恐らくはないね。もし、あるとすれば、それは此方の思ひやうが足りないのか、それとも向うが低能なんだね。さういふ人は寧ろ憎むよりも憐れんでやらなければならぬやうなものだね。』

半分しかわからなかつたけども笑ひに打消して了ふには餘りに眞面目なTをお園は見た。(暫らく逢はない中に、何うしてこんな風になつたらう。)かう思ひながらお園はTを凝と見詰めた。Tにも大きな心の悲劇があつたらしいのがかの女にもわかるやうな氣がした。

八十九

Tの話やら、態度やらからお園が捜し出して來たものは、かの女が逢はない以前に思つてゐたものは、丸で違つたものだつた。或はTは別な人になつたかとさへ思はれた。洒落や、歡樂や、通や、粹な心持や、つまり女が隙をもとめて細かに且つ巧みに切り込んで行けるやうな餘地は少しも持つてゐるに、否、持つてゐてもあらはに現はさずに、現に、女中を傍に置いて、二人の關係などは少しも疑はれないやうな眞面目な話ばかりをした。お園にしろ、女中にしろ、ちよつとでもそれから一步先に切込んで入つて行かうとするとTは黙つてたゞ盃を口に當てた。

女中のゐなくなつた時、

『ちよつと逢はない中に、貴方は随分變りましたね。』

かうお園が言ふと、

『さうだらうね。變つたらうね。いろんなことがあつたからね、あれから。』

『何うなつたんですの一體? 本當に?』

『あとで話すよ、ゆつくり。』

かう言つたが、持つてゐた盃を下に置いて、

『それにしても何う變つたね?』

『何うつて、別に言ひやうはないけど、眞面目になつたわねえ。』

『元から眞面目さ。』

『それは、先だつて眞面目でないことはなかつたけども、一層眞面目になりましたね。』(もう私なんか相手にしては下さいませんね。)といふ表情をお園が見せると、

『言はば、まア、何う言ふんだね? 馴れられないッて言ふやうな形かね? それともまた氣むづか

しくなつたといふのかね？」

『さうでもないですけどもね。』

『ぢや、薄情になつたやうに見えるかね。』

『そんな風にも見えませんけれどもね。何處かかう……』お園は言ひかけてよして、また笑つて見せて、

『ちよつと言ひにくいわね。』

『言つて見給へよ。』

『さうですね。色戀とか、何とか言ふよりも、兄さんとか、伯父さんとかに逢つたやうな氣がしますね。』

『ふむ、さうかな……さうだらうな。』

ちよつとTは考へて、『何うしても、さうだらうな。僕の心持が今さうだから。お前に逢つても、色戀とか何とか言ふことよりも、お前の力になつてやりたい。お前の頼りになる人になつてやりたい。たとへば、お前が相談して來ることでも、成るだけはそれを出来るやうにしてやりたい。もし物質で出来なければ、言葉だけでも力になつてやりたい。さう思つてやつて來たんだから——』

『ぢや、もう、私なんかのことは考へてゐないのね？』

『さう言ふから駄目だよ。さうぢやないよ。誤解しちやいけないよ。』Tはぢつとお園の顔を見詰め

て、『お前などの考へでは、色戀ツて云ふことは、唯、體を合はせることばかりと思つてゐるのかえ？』

『……………』

『さうかえ、何うだえ？ さうならさうで、さうした迷ひから覺めなければいけないね。體を合せることも大切なことには違ひないけれども、それ以上に、色戀は本當のことがなくては駄目なんだよ。さうでなくつちや、いくら男から男へ移つて行つたつて駄目なんだよ。體を合せるのは、魂を合はせるための方だよ。體を合せてゐれば、おのづから魂も合ふやうになるにはなる道理だけでも、それよりもつと大切なことがあるんだよ。體を合はせてゐたつて、魂は一合はずにゐるやうな夫婦も、あつちこつちにざらにあるぢやないか。だから、お前のことを考へないどころぢやない。體を合はせるばかりでなしに、それ以上に、本當にお前を思つてやらうと僕は思つてゐるんだ……。だからこそわざ／＼やつて來たんだぢやないか。』

九十

兎に角、此處では、詳しい話も出来ないので、何處か、二人きりでゐられるやうな處をあれかこれかと心の中でさがしてゐたお園は、

T町へでも行つて見ませうか。』

かう言ひ出した。

『此處ぢやいけないのかえ。』

『いけないことはないけれど、まだ来たばかりだし、貴方が泊つてゐらつしやるにも何だか氣詰りでせうから、ちよつと出て見ませうぢやありませんか。』

『……………』

『いやなの？』

『いやぢやないけど、お前は好いのかえ？』

『それは構はないわ。斷つて行きさへすれば——』

『此處でも僕は構はんけども……』

『いろ／＼話があるんですよ。私だつて、貴方があゝした薄情な眞似をして歸つて行つてから、いろ／＼な目に逢つたんですからね。死なうかしら？』と思つたこともあるんですからね。私が嫌ひになつても、話だけは何處かでゆつくり聞いて貰はなくつちや——』

『それはいくらでもきくがね。』

『此處では、ちよつと具合のわるいことがあるんですよ。それは、あとで話せばわかるんですからね。お酒はもうよして、御飯でも食べて、それから出かけませうよ。』

『さうしても好い。』

餘り進まないのを強ひてさういふことにして、お園は店に来て、半日ほど暇を貰ひたい話を上さんにした。上さんはいやに笑つて、(何も餘所に行かなくつたつて、此處でも好いぢやないか、邪魔をしやしないよ。)と言つたやうな表情をしたが、それでも別に厭な顔をも見せなかつた。お園はみづから辯解するやうに、『もと、東京で恩になつた旦那なんですよ。丁度、此方に來た次手に寄つて呉れたんですもの。そんなんぢやないんですよ。それは、お美喜さんに訊いて見れば、わかるわ。固い旦那なんですもの。ねえ、お美喜さん。』など、其處に來たさつきの中話に話しかけた。

一階のTは、お園がさう言ふので、午飯をすましたり、勘定をしたりして、やがて其處から出懸けた。店を出て、五六間此方に來てから、

『何處へ行くんだえ？』

『T町へ行きませう。』

『歩いてかえ？』

『近いんですよ、T町へは。さうですね、半里位しかありませんよ。』

『半里ぢやきかないよ。』

『なら、もう少し歩くと、車があるかも知れないから、あつたら乗りませう。』

『なければ、歩くのかえ?』

『でも、好い氣候ぢやないの、半里位のんきに歩くのも好いぢやありませんか。話しながら歩く方が車に乗るよりいくら好いか知れやしない。』

Tは爲方がないといふやうにして、お園について歩いた。

『家で、變な顔をして見てたね?』

『見てゐたツて、構ひやしませんよ。私、あそこに、女中として來てゐるんぢやないから……。客分として來てゐるんですもの。』

その理由を突込んできて來たなら、すぐ打明けて話さうと思つたけれども、Tは別にそれをあやしみもしないので、お園は黙つて靜かに歩いた。かうしてTと歩くのは、お園には何となく嬉しかつた。色戀であると同時に、何處か兄さんのやうでもありまた伯父さんのやうでもあるのが頼もしかつた。どんな勝手な真似でもして、縋つて、すねて泣いて困らせてやつても構はないやうな氣がした。路の兩側の草藪の中には、小さな山躑躅が燃えるやうに所々に雜つて咲いてゐた。

九十一

少し汗ばむやうな六月の午後、黄熟した麥の刈り残されたのも最早少く、水田には緑の長けた稻が戦

ぎ、蠶豆の實が大きく目につくやうな田舎道を、並ぶやうにして歩いて行つた彼等の間には、次第に話が話に纏はり、心が心に絡み、それからそれへと深い底の糸を引き出されて來るやうにして、お園もいつかその身の上話をも残すところなく打明けて話した。これまで誰にも言はなかつたやうな身を投げやうとした話をも、一里の闇の路を教員と提灯をつけて歩いて來たことを、水たまりがあつてそれを男の手に縋つて辛うじて飛越えた話をも……。否、更に進んで、今の身の上——河添ひの旅舎からK町へ、K町から更に此處にやつて來た紛糾について話した時には、流石に、N屋の主人に圍はれてゐるとは言ひ切つて了ふことが出來なかつたので、未だにN屋の主人に執念く追ひ廻されてゐるやうにして話したが、それを聞いた時にはTは少からず動かされたく、『ふむ、ふむ、』と言つて熱心にきいてゐたが、急に圖星を射でもしたやうに、『それぢや、N屋の主人に無理に手込めに逢つて、それであそこに來てゐるんだね、』と言つてお園の顔を凝と見詰めた。

『さうぢやないですよ——』

かう慌てゝお園は打消したけれども、サツと顔が赧くなつて來るのを何うすることも出來なかつた。

『いゝやね。言つて了つたツて……。お前なんか取つては、體ぢやなくつて、心なんだから……。節操がそのすべてぢやないんだから。』かう慰めるやうに、何もきまりをわがる必要はないといふやうにやさしく言つて、『女だから、何うもしやうがないんだね。ちやんときまつた男があつてさへ、まごんする

と、他から手を出されるんだから……。しかしあそこの主人が手を出さうとは思はなかつたね。堅さうな人だつたがな。』

『堅いには堅い人ですけどね……。』かう言つて、お園は長くその主人の世話になつてゐる氣はないといふやうな話をそれとなく匂はせた。

『そんなことを言はずに、世話になつたら好いぢやないか。』

『もう懲々……。お上さんのある人には、つくづく懲りましたからね。第一、罪ですもの。女同士が、味方にならずに、敵になつてゐるのは厭ですもの。』

『それはさうだね。……。何うしても、男と女とは二人が本當なんだね。二人で、本當にお互ひの魂を攫むやうにするのが本當なんだね。』

かう言つて深く考へるやうにしてTは歩いた。お園も黙つて歩いた。

『僕もあれから、随分いろんな目に逢つたよ。』暫くしてからTは言つた。

『何うなすつたの？ 一體——？』

『あの女が他の男に眞剣になつて戀ひしたさまを、ちつと黙つて見てゐなければならぬやうな眼に逢つたんだよ。お前は山の旦那を振放つて、此方に来て、いつそ身を投げやうとしたさうだが、僕はそれを振放たずに、ちつとして見てゐたんだよ。辛かつたよ。』

『今は、何うなすつて？』

『まだ、何うにもなりやしないけれど、そのまたあの女が、その戀ひした男を本當に攫むことが出来ないで煩悶してゐるんだよ。向うが矢張、女を玩弄具にするやうな質の男だからね。』

『世の中は皆なさうね。いたちこつこね。山の旦那だつて、またあの山の女だつて、矢張さうですからね。何うしてかう世の中は、いすかの嘴のやうにチグハグになるやうに出来てゐるんでせうね。』

『皆ない、加減な所で、面白半分にやつてゐるからだよ。本當でないからだね。』

『本當にさうですね。』お園もかう心から言はずにはゐられなかつた。

九十二

お園が密かに胸の底に抱いてゐる欲望——もしTにさういふ氣があつたなら、假令Tに女があつても構はないから……。東京と一緒に伴れて行つて貰ひたいといふ欲望、その欲望をも、初めの中はかなり強く、はつきりと把持してゐて、Tの理窟つほい、眞面目すぎる言葉や態度を、寧ろ水臭いやうにも、または隙を見て迫つて行くかの女を防ぐための手管のやうにも思つてゐたが、次第に、さうした自分の欲望は失せて、Tの言ふことが、またTのかの女の爲に戀以上に、兄か伯父かと思はれるやうに深切に、爲めを思つて言つて呉れることが、染々とお園の胸にも染みわたるやうになつて來た。お園はもう何も彼も

Tにだけは隠さうとは思はなかつた。

N屋の主人に身を任せたのも、實はその上さんに對する反抗のためだといふことを話した時にはTは、『それ見給へ、それがいけないと言ふんだ……。それが本當でないと言ふんだ。自分の身が假令漂泊しなければならぬからと言つて、それで好い加減に、樂な方に身の振り方をきめて了ふからいけないのだ……。だからいつまで経つても、男から男へと移つて行かなければならぬのだ。山の旦那のとどつてその通りだ。此方からもつと深切を見せてやらなければならぬ所だつたのだ。それをさうはせずに——つまり辛いから好い加減にして忘れるなりやめるなりするから、その辛さの程度が低ければ低いだけそれだけ、また此次ぎも同じやうなことをする段取りになつて行くのだ。何遍も何遍も、人によつては、一生同じことをして暮して行かなければならぬのだ。さういふ女が澤山あるぢやないか。』かう言つてお園の心の底を動かすやうにした。

『本當にさうですね。』

お園にも、Tといふ人が何ういふ人であるかといふことが、次第に飲み込めて來た。成ほどそれはさうであるとお園は思つた。これ迄かの女の經て來た閱歷を振返つて考へて見ても、皆なその通りである。Tの言つた通りである。否、彼女の經て來た閱歷がさうであるばかりではない、さうした境涯に生きてゐる女達は皆なさうである。さうでないものは一人もないと言つてもよい位である。若い中は好きな男か

ら男へ、中年になつてからは、金のある男から男へ、老いては、止むを得ず女房子のある一人の男に満足して、羨びて日蔭者となつて了ふのがその大團圓である。

『つまり、なるやうにしかなくなつて行つて、すまして行くからですね。』

お園はかうTに言つた。

『さうだ……。だから、さういふ運命にいやでもなつて行つて了ふんだ。先へ先へと考へずに、あとからあとへと廻つて行くやうになつて了ふんだ。人間はそれぢやいけない。自分の思つたことは、正しいことなら何うしても、何んな思ひをしても、佛様に手を合はせてまでも、通さうと思ふ位に深く考へて見なければいけない。』

『本當ですね。』

かうお園は染々身に思ひ當るやうにして言つた。

靜かな田舎道を並んで纏れるやうにして歩いて行くかれ等が、かうした話をしてるようとは誰が想像し得るであらうか。甘い色戀の中としか見えないかれ等を。または人目にも羨ましいと思はれるやうに打解けて話して行くかれ等を。現に、その時分、かれ等の出て來た料理屋でも、上さんや女中が寄つて、種々かれ等の甘い噂をしてゐたのであつた。

しかもお園に取つては、色戀どころが、深い深い忘れられない印象を與へられたそのT町までの田舎

道ではなかつたか。

九十三

お園には夕暮の河水に面して立つた時のやうな眞面目な悲しい心が一杯に胸に漲つて來た。しかしそれは單に自分の願望が遂げられないためといふやうな單純なものではなく、自分の過去が振返られると共に、Tの言つた言葉なり説明なりの中にいかに本當な眞面目な心持が潜んでゐるかといふところに、ひとり手に醸されて來た人間の悲哀といふやうなものであつた。お園は何も知らずに、折角味ふべく理解すべく置かれた境遇をも運命をも、何をも味はずに、理解せず夢中でやつて來たことを思つた。浮草のやうに今日は西、明日は東といふほどではなかつたにしても、要するに、浮はついた心持で今まで送つて來たことを思つた。『さうなるのは當り前ぢやないか。』Tばかりでなく、自分でも、さう言つて自分の腑甲斐ないこれまでの生活や心や魂を鞭うちたいやうな氣がした。

話すところに由ると、Tは色戀のあらゆる辛さを嘗めたといふ。2でなしに、3として存在しなければならぬ苦惱を散々に嘗めたといふ。女を他から離して自己のものにするためには、女の生命を奪はうかと思つたことも何遍あるか知れなかつたといふ。それでも――それほどに辛い眼を見せられても、それでもTは女を捨てなかつたといふ。愛する心と憎む心とが渦のやうに一緒に亂れ合つて、何うする

ことも出来なかつたといふ。普通ならば、男の意地とか、またはその女の爲に金をつかつたとか、これほど心と情を見せても此方の心がわからないかといふ形で意地わるく女を把持してゐるものだが、さうでなしに、その女が必死にTのために必要であつたといふ純な心で、Tは竟に竟に捨てる氣にはならなかつたといふ。そしてそのため、女は何うであらうとも、此方だけは、何事があつても、何んな屈辱を女が此方に示すやうなことをして見せても、變らずに、絶対に女を愛してやらうといふ心を起したといふ。それからといふものは、その決定を得たために、心が色戀などといふ、報酬的のところに留つてゐずに、非常に安らかになることを得たといふ。さうしたTの話の聞いてゐる間、お園は何處となく涙の胸にあふれて來るを覺えた。かの女は曾てさうした男の深い戀に逢つたことはあるであらうか。さうした深い戀心のかの女に對して感じなければならぬやうな位置に度々男を置いた經驗はあるけれども、男は決してTの言つたやうな深い心を曾て一度でも注いで來たことはあつたであらうか。皆な單純に、怒つたり恨んだりして、そのまゝ向うに行つて了つたではないか。

『それほど思はれた方は仕合せですね。』

かうお園は言はずにはゐられなかつた。

成るほどそれほどまで思はれて、猶も女が男を捨て、男が女を捨てることは出来ないに相違ない。お園はTの話の中に言ふに言はれない人間の深い魂のあるのを見落すことが出来なかつた。難有い、難有

いやうな念が滲むばかりに心の底から湧いて来た。

『お前は、さうは思はないかね。兎に角、かうした男を——かうまで男と女の苦惱を嘗めて来て、男と女の苦惱のためには、何んなことでもして一臂の力を假すことを惜しまない僕のやうな男を、色戀でなしに、このさびしい辛い人生の伴侶として持つといふことは、非常に心丈夫なことだとは思つて呉れないかね。そしてさうした伴侶は、戀人以上、または兄乃至伯父以上に、本當に力になり、頼りになる伴侶だとは思つて呉れないかね、矢張、女だから、體を合せる戀人でなくつては不安心に思はれるかね。』

『そんなことはありません。よくわかりました。』

お園の眼には涙が光つた。

九十四

『お前の今の考へでは、N屋の主人を捨て、僕と一緒に東京に出たいと思つてゐるかも知れないけれども、しかし、それはいけない。東京に出るなら出るで、もつと眞剣に、眞面目に考へて見なくつちや——』かうTは言つたあとで、『本當に眞面目に、眞剣に考へたことなら、いつでも、何んなにでも力になつてやるよ。かう僕が言ふと、それは普通のお世辭で、色戀でもないのに、又たとへさういふことが一度や二度はあつたにしてもさうした言葉には縋ることは出来ないと思ふかも知れない。世間は皆な

さうだ。男女の間も普通には皆さうだ。……併し、僕はさうぢやない。僕はいつでも、お前の本當の生活をするための援助はいつでもしてやる。いつでも遠慮なく相談する方が好い……。『暫し途切れて、『これも何かの縁ぢやないか。突然、あゝいふところで逢つて、その逢つた時から、理由なしに、お前が僕を引きつけて、兎に角あの時、ああいふ眼にお前を逢はせたいといふことは、通り一遍に、袖を觸れて通つて了ふ人々とは、何處かに違つた何物かがあつたに相違ない。だから本當にさうする方が好いよ。僕はお世辭でも何でもなしに、本當にさう思つてゐるんだから……。』かうTは染々した調子で言つた。

お園は何がなしに、涙が出て、急には何も言ふことは出来なかつた。

かれ等の前には、田園は既に盡きて、自聖の土藏と、製粉會社の大きな工場の烟突と、信號柱のそれと指點される停車場とを持つたT町が既にその前にあらはれて來てゐた。麗かな少し暑い位な午後の日影は、茶色が、つたTの薄い外套とそれと並んで歩くお園の派手な納戸色が、つた蝙蝠傘とを照した。行違ふ人達は皆な振り返つて見て行つた。

『暑いね、なか〜。』

かう言つて、Tは長い話から俄かに自分に返つたやうにして、薄い外套を右の手で脱いだ。

『持ちませう。』

かう言つてお園が寄つて來るのを、

『好いよ、好いよ。』

と言つて、それを腕にかけるやうに抱へて持つて歩いた。

T町に入らうとするところで、

『何處に行くんだね?』

『何處ツて、まだきめてもないんですよ。』

『停車場前へ行くかえ?』

『さア、あそこへ行つたツて、つまりませんね。』

『さうだな……』かうTは言つたが、『まアもう少し歩かう。……今日は何か御馳走してやらう。園ちやんも、今日のはのききに一日遊ぶつもりで、勝手にするさ。』

この園ちやんがお園に一種變つたはづかしさを覚えさせた。河添ひの旅舎にゐた初めの頃は、Tはよくこの『園ちやん』を使つたものだった。

普通ならば、かうしたTの態度に満足せずに、猶ほ深く甘えて突込んで行つて、『園ちやんなんて水臭いわ。』とか、『人を妹扱ひにばかりしてゐる。』とかなんとか言つて、そのまゝにはして置かない場合であつたけれども、Tの話の眞面目であつたのと、一々深くその言葉がお園の胸に染み込んでゐるのとで、さうした軽い浮はつた態度に出ることは出来なかつた。それがお園には悲しいやうな氣がした。

二人は停車場を横に掠めて、靜かに町の通りの方へと歩いて行つた。

九十五

お互ひに今夜を何うしやうかといふことは問題であつた。Tは過失はもう再びすまいと思つてゐる。お園もさうした色戀の心を起さうにも起されないやうな氣分になつてゐる。それでは、二人は物でも食つて靜かに話でもして、本當の同胞のやうにして清く別れようか。しかしそれも出来なかつた。二人は彼方に行つたり此方に行つたりして、日の暮れ近くまで、町やら、屋敷やら、城跡やら、活動小屋のあるあたりやらを歩いた。

東京から來た子芝居の連鎖劇の看板が夕暮の空氣の中にほんやり見えて、處々にはもう灯のついた家もあつたが、そのあたりのさまはやがて來る夜の賑かさを想像させるに十分であつた。飲食店の軒を並べたところから少し行つて奥の方を覗くと、出來てからまださう日を経たない大きな活動寫眞館が、周圍に電氣やら、酸漿提灯やらを無數に美しく輝かして、藝者を伴れた男や、酌婦らしい女や、または町の娘達が、既にがやがやとその館の附近に渦を巻いて集まつてゐるのをかれ等は見た。

『何うする? 何か食はうか。』

『何うでも……。』

『しかし、今日はもうどうせ好いんだらう。泊つて行つても……。』

『でも……。』

『歸るのかえ？』

『歸らなくつても好いには好いんですけども……。』

『それぢや、活動でも見て、今夜は遊ぼうか。』

かう言つたが、ふと、其處に小綺麗な、ちよつとした旅館兼料理屋らしい家のあるのをTは見て、

『此處は何うだえ？』

お園もちよつと覗いて見たが、

『あ、こゝが富士屋だ。何處にあるかと思つた？ 何でも、T町の活動のある近所だとは聞いてゐたんですけども、何處にあるのかしらとさつきから思つてゐたんですよ。此處は、町でも好い旅館ですよ。』

『ぢや、さうしやう。飯でも食つて、活動でも見ようぢやないか。』

『え……。』

で、二人は入つて行つた。それは一人客などは、じろくくと顔やら扮装やら持物やらを見られて、『生憎、お座敷が塞がつてをりまして、』などと斷られるやうな家であつたが、女と一緒にあるといふことが――

―しかもその女が此處等の酌婦らしい扮装をしてゐるといふことが、早く諒解を上さんに與へたらしく、そのまゝちやほやと迎へられて、やがて二人は裏の中庭に面した離れた六疊の間へと案内された。

『好い家だね。』

『え。』

かう言つたが、そのまゝ、疲れたといふやうにして、ぐつたりと體を、足を横にしてお園は坐つた。

『疲れたらう？』

『え、随分……何しろ、かなり歩いたんですよ。』

『それに、理窟ばかり言つてきかせたからね。』

かう笑ひながらTが言ふと、

『でも、本當に、私のためになりましたよ。誰もあんな話をして呉れる人なんかなかつたんですよ……。つくづく私も考へましたわ。これからは了簡を入れかへなくつては駄目だと思ひましたわ。矢張、女はちやんとした亭主を持たなければうそね。』

『それは、さうとも……。お前にも、何うかさうなつて貰ひたいね。そして、かうして二人で歩いたことを、昔話にして話したいもんだね。本當だよ、眞面目でなくつちやしやうがないよ。一生男から男へ移つて行かなければならないからね。』

それは不思議に眞面目な、センチメンタルな、いろ／＼なことの取集めて胸に簇つて来るやうな夜であつた。お園には何も彼も思ひ出されて来た。最初の男に別れた時のことも、温泉場に澤山に集まつて来た放蕩兒のことも、ある男にあつては狙はれて自分は家に隠れてゐなければならなかつたやうなことも、何も彼も……。自分のやつて来たことには、皆なそれ／＼その時々理由があつて、別に惑ふところもなく、繪巻に繪巻を重ねて、時には浮氣に、時には利害に、また時には自暴に、鐵火に、俠氣に、義理と人情の柵に、一つ一つさまざまの異つた光景を描いて残して来てはゐるけれども、しかも、今度のやうに、深く本當のことを考へさせられるやうな心の位置にその身を置いたことは、つひぞこれまで一度もなかつたのであつた。お園は、自分の一生の繪巻の中の最も荒涼とした、また最も色彩に乏しい、艱難と不如意との荒野の中にさまよつてゐるやうなその數枚の繪の中に、かうした一夜があらうとは思ひもかけないやうな氣がした。『さうですね、本當にさうですね。N屋の主人のことなんか何うでも好いんですね。そんなことは、小さなことなんです。本當に世話になるならならぬ、ならないならならぬとまめて了へば好いんですね。』かうお園は痛感したやうにして言つた。

これでも戀かと思はれるやうな戀ではないか。自分の心のまゝを隠すところなく言ひ、且つまたその思つてゐることを遠慮なく打ち明け、そして猶ほ互に思はうとする戀ではないか。その間には、物質も、利害も、争鬭も、不純な手管も何も彼も入つてゐない。同胞の愛、骨肉の愛と更に異るところのない戀ではないか。明日は別れて行つて了つても、お互に一生の間忘れずに、また艱難に逢つた時には、言つてやりさへすれば、いかやうにしてもその援助をしようとする男のいふ戀ではないか。これ以上に、かの女はTに對して望むところがあるであらうか。かうした情は、愛は、かの女の要求を直ちに容れて、一緒に東京に伴れて行かうといふ戀よりも更に一層深い本當のものではないか。何故なら、かの女からは何物をも求めずして、そしてかの女のために永久に思ふことを忘れないと言ふのではないか。

『もう、よくわかりました。本當によくわかりました。』

かうお園は眞面目な顔に嬉しさうな色を湛へて言つた。旅館の女中達——さつきから、かうして坐つて、酒も飲まずに、戲談も言はずに、また膳が運ばれて來ても碌々お酌もせず、ちつとも色戀といふやうな態度を見せないお園を不思議さうに見てゐる女中達に對して、かうしたTのやうな、眞面目な、深切な、本當にやさしい男を持つてゐることをお園は誇りたいやうな氣がした。またさうした女中達に比べて、自分が何段も何段も上に浮び上つたか知れないやうな氣がした。(本當にさうだ。信じなければ駄目だ。信じさへすれば、何事でも出来ないことはない。)かう思つたお園は、新たに心の光明を得たやうな氣がした。

Tは言った。

『だから、さつき報酬的の心がなくならなければ駄目だと僕が言ったのだ。お前と僕との間にしても、だから、體を合はせることが、色戀が、目的ではないと言つたのだ。つまりそれ以上にお前のことを思ふと言ふのだ。だから、他日、お前が本當にかうした生活から、男一人女一人の生活に入ることが出来れば、一番先に喜ぶのは僕だよ。』かう言つたが、急に悲しさうに、『でも園ちゃん、僕は漸く此處まで来た。此處まで来るのは辛かつたよ。』種々思ひ出すやうにしたTの眼には涙が光つた。

九十七

『活動でも見せてやらうか。』

そんなものは見なくつても好いと言ふのを、だつてまだ早いからと言つてTはお園を伴れて出懸けた。賑かな灯、物を賣る店、あたりには男や女がぞろぞろと通つて、淋しい田舎町にも似合はず其處だけは切離したやうに明るい光線が渦を巻いてゐた。闇夜の空は晴れて、星がきら／＼と瞬くやうに美しく光つた。見かけは大きな活動館であつたけれど、入つて見ると、一等席も二等席もないやうなごたく／＼とした場所、立錐の地もないやうに詰つてゐる田舎の觀客の頭が芋の子でも洗ふやうに黒く一杯に満たされて動いてゐるのが見えた。役者の言つてゐる臺詞、碌々調子も合はないやうな鳴物、行儀の悪い觀客の囁き、

何處も彼處も、一杯で、舞臺を明かに見得るやうな場所は、容易に二人には見當らなかつた。『此方が好いかも知れない。』かう言つて、觀客の群をわけて、いくらかすいた方へTはお園を伴れて行つたけれど、其處でも舞臺の上の半分——役者の胸から上だけしか見ることが出来なかつた。

『駄目だね、矢張。』

かうTは匙を投けたやうにして言つた。

お園はそれでも、入らない以前とは、いくらか見たいやうな念が生じたらしく、頻りに群集の中をわけて、脊伸びをして、足を爪立て、一生懸命にそれを見ようとした。

ふと傍を見たTの眼には、そこで菓子だの蜜柑だのを賣つてゐる店の隅に、小さな腰掛——今まで誰か腰掛けてゐてちよつと用事が出来て立つて行つたやうな小さな腰掛のあるのが映つた。

『ちよつと貸して呉れ給へ、ぢき返すから……。此處にゐた人が來たら返すから。』かう言つてそれを引張つて來て、そこに立つて熱心に舞臺の方を見てゐるお園の袖を引いた。

『好いの？ 借りて？』

『好いさ。』

で、お園はそれに乘らうとしたが、急に中心を失つて、危く倒れかけやうとした。Tは急いで半ば抱へるやうにしてそれを支へたが、お園は半身をTに寄せ、右の手で、しつかりTの肩につかまりながら

辛うじてその小さな腰掛の上に立つことが出来た。

『見えるかえ？』

『え……』

しかし肩の支へがなくては、危なくつてとても立つてゐられさうにもないので、Tはそのまま、お園の温かい手を肩に感じさせながら黙つてそこに立つてゐた。何か武士と娘とが出てゐる幕らしく、田舎廻りの役者の臺詞がいやに不調和に、癩立つて高くあたりに響いてきこえた。

暫くお園は見てゐるが、やがて下りようとするので、

『好いよ、好いよ、見ておいでよ。』

『でも、詰らないのよ。』

『下りるのかえ？』

お園はTの力を借りずに、そのまま下に身を卸した。

『貴方見て御覽なさい。』

『好いよ。』

『でも……』

Tもちらつとその上に乗つて見た。武士がまた一人出て來た。前の武士との立廻りが始まりさうに見え

た。何の芝居だかちよつとわからなかつたけれど、矢張、一人の女と二人の男の悲劇らしかつた。

『かうして立つて見るわけにも行かんね。』かう言ひながらTは下りた。

『随分大入ですね……。』

『それはさうさ、三里も辨當を持つて、朝からやつて來るやうな連中だからな。』

お園はまた腰掛の上にのほつた。

九十八

やがてちよつと隙のある處を發見して、そこで一時間ほど立つて見てゐるが、眼は舞臺の方へ行つて居るに拘らず、お園の心は常にその内部に向つて頻りに波立ちつつあるのを感じた。攫んだやうで攫んだやうでないTの言葉、それを攫んだと信じなければいけないとTは繰返し繰返し言つたのであるが、そのTの心持は決してわからないことではないのであるが、またさうしたTのやうな男を持つたことをも喜ばずにはゐられないのであるが、しかも淋しい悲しい思ひにお園は襲はれずには居られなかつた。矢張、何處まで行つても、かの女はさびしい孤獨ではなかつたか。希望を置いたTからも、何等的確なものを攫むことは出來ずに、明日は矢張あの旅舎に歸つて行かなければならないのではないか。『そんなことは小さな問題だ。厭なものなら厭と言つて了つて差支ない。』とTは言ふけれども、矢張、あのN屋の主人を

かの女は笑つて迎へなければならぬではないか。

しかしTの言つたことは、力強いあるもの——即ち、自分がもう少し眞面目にならなければならぬ。今までのやうにうかうかと浮草のやうな生活を送つてはならない。眞剣にあるものを攫むためには、観音さまへ手を合わせる位に眞面目にならなければならぬといふ心持をかなりに深くかの女に打ち込んだ。身を投げやうとしてW川の畔りに立つた話をした時、Tは心からそれに撲たれて、一方かの女を憐れむと共に、一方かの女のために、さうした心の経験をしたことを祝賀したが、その時言つたTの言葉、『それを生かさなくつてはいけないよ。心から自分の不幸であることを痛感しなくつてはいけないよ。』と言つたその言葉の中に、いかに眞面目な、やさしい、人間の心があるかを思ふと、お園は感謝せずには居られないやうな心が湧き出して来て、涙が出て爲方がなかつたことを思ひ出した。自分の相手として、單に色戀の相手としてTを今まで視てゐたことが恥かしいやうにも、勿體ないやうにも思はれて来たことが思ひ出された。

『もう歸りませう。』

かう急にお園は言つた。

『まだ、好いぢやないか。』

『だつて、こんなものいつまで見てゐたつてしやうがない。それよりも、もつと貴方の話をきく方が好

い。

『さうかえ、それぢや歸らうか。』

かう言つて、Tは先に立つて、群集をわけて、出口の方へと出て行つた。宿に歸つて来てから、

『田舎の連鎖なんか、つまらんだらう？』

かうTが言ふと、

『詰らないことはありませんけども、考へると涙が出て来て、あんなもの見てゐられないやうな氣がするんですもの。』

『何うして？』

『だつて、貴方の仰有つたことについて、いろいろ考へなければならぬことが澤山に澤山に出て來るんですもの。』

『なんだ……。あそこで、そんなことを考へてゐたのかえ？』

『だつて、私は淋しいんですもの。』

『いや、さつき僕の言つたことを信じて、眞面目にやつてゐさへすれば、ぢき淋しくなくなるよ。運が向いて來るよ。つまりぬ心配や苦勞はしない方が好いよ。それは確だ……。今から豫言して置いても

好い……』かうTは確信するやうな力強い調子で言った。

九十九

旅舎の女中達の眼には、二人の状態が初めから異様に際立つて感じられて見えた。女が酒の酌をするではなし、男が戯談を言ふではなし、何か真面目に、真剣に話をして、時々二人とも黙つて考へるやうにするかと思ふと、今度は男が比較的の高い聲をして、兄が妹でも意見するやうにして話したり、さうかと思ふと、嬉しさうに楽しさうに女が笑つてゐたりして、何が何だか少しも鑑定がつかなくつた。『變な人達ね。』など、女中達はかけで噂した。

でも、さつき並んで活動館に出かけて行つた時には、矢張普通の色戀の仲として點頭かれるやうな形があつたが、一時間経つか経たないのにもう歸つて来て、別に酒を命ずるでもなく、菓子を取るでもなく、さうかと言つて、寝ようとするでもなく、再び相對して坐つて、微温い茶を絞つて汲んで、それを口に當てながら、また盡きない話を始めるのであつた。

女中は命ぜられた鐵瓶に湯を入れて持つて來たが、再び室を出て行かうとする時わざと、

『もう、お床を延べませうか。』

『まだ、好う御座んすよ。』かうお園は言つたが、女中の縁側を向うに歩いて行つたあとで、『もう、そ

んなに遅いんでせうか。』かうTに訊いた。

Tは時計を出して見て、

『まだ十時少し前だよ。』

『なら、まだ早いわね。もう少し話しませうね。』かう言つたが、氣がついたやうに、『お酒を少し召上る？』

『さア、少し飲むかな。』

ベルを押してまた女中を呼んであつさりつまみ物か何かで酒を一本持つて來て貰つて、それからまた長い長い種々な話がつゞいた。

堀一つ隔てた向うの活動館では、未だに盛んにやつてゐるらしく、チヨボの入る音だの、板を叩くやうな音だの、観客の騒ぐ音だの、癩高い役者の臺詞だのが、しめやかな二人の話の間を縫つてきこえた。『ちや、さうした方が好う御座んすね。厭なら、厭だときつぱり言つて了つた方が好う御座んすね。』かう言つたお園の話は、またN屋の主人のことに舞ひ戻つて來てゐた。

『そればかりではないよ。何でも、きちんとすることはきちんとして置かなければいけないよ。ぐづぐづして迷ふから、土臺がいつまで経つても立たないんだから……。今度こそ、この人はと思つたら、一生懸命に、真剣にならなくつては駄目だよ。』

『よくわかりました……。でも、本當に、今日はいろんなことを教へて貰ひましたね。淋しくても、さうした貴方がゐると思ふと、何んなに心丈夫だか分りやしません。そればかりを力にしてゐますよ。』

『好いとも……』

『うそぢやないでせうね。』

『まだ疑つてゐるのか。しやうがないな。』

『さうぢやないんですけれどもね。ちよつと言つて見たんですよ……。なら、これから、私が手紙を上げて返事を下さいますね。東京に行つてお宅にあがつても、逢つて下さいますね。』

『あゝ。』

『屹度ですね。』

『くどいね……。』Tは笑つて、『その代り、過ちは再びしないよ。今夜から本當の兄妹だよ。』

『兄妹？』

そんなことが出来ますかと言ふやうな顔をして、お園は艶に笑つて見せた。Tも一緒に笑つた。

百

『ぢや、もう、これからすぐ歸るのね。』

『あゝ。』

『ぢや、また、その中、手紙を出しますから。その時は本當に相談相手になつて下さるわねえ。』

『いゝとも……』

『矢張、N屋の方は、餘り長く續けてゐない方が好う御座んすね。』

『その方が好いと思ふね。』

そのあくる朝、その旅舎を出る前に、かれ等はこんな話をした。言ひたいことは澤山にある。また言つても言つても盡きないやうな、いかに言ひあらはさうとしても十分にその心持を男に示すことの出来ないやうな氣分がお園の胸に一杯に満ちわたつて、さびしい悲しい氣がした。さう思つてはいけない、また濟まないと思ひながら、しかも、矢張かの女の手からTが滑つて向うに行つて了ふやうに思はれて爲方がなかつた。

『だつて、私が困つて行つた時には、貴方は屹度相手にはしないに相違ない。』かう昨夜も度々言つたが、その時は、Tは、眞面目に、眞剣に、寧ろ妹でも叱るやうに、

『言ふ口の下から、女はすぐあゝ疑ふんだからしやうがない……。疑つてはいけないよ、本當に……。疑つてゐては、いつまで経つたつて、お前の本當の生活は建設されなないよ。』と言つたが――そしてその言葉はお園はよくわからないことはなかつたけれども、それでも便りなさがわびしく心の底を占めた。

女の身の情けなさは、また、弱い女性の身の悲しさには、さうした本當の愛は言葉として、気分としてわからないことはないのであつたけれども——けれども矢張、離れ心地がさびしく物足らなかつた。何んなに爲めになる、かの女の心の革新を圖るために有効な言葉であつても、言葉そのものよりも、Tが熱心にかの女に向つて心を注いで来て、すぐにも東京に伴れて行つて呉れた方が嬉しくもあり、頼もしくもあるやうな氣がした。しかし、さうした複雑した心を言ひあらはすことがお園には出来なかつた。またそれを言ひあらはし得ないやうな心の位置に今はお園は身を置いてゐた。

やがてかれ等は旅舎を出て、停車場の方へと向つて歩いた。

『お前は、すぐ歸るのかえ?』

かうTは訊いた。

『え……』

『具合がわるくないかえ?』

『別に、具合がわるいといふこともありません……』

Tはあとを何か言ひたさうにしたが、しかもそれは言はない方が好いといふやうにして黙つて歩いた。お園にしても、Tがかの女を思つてゐないことはないのはよくわかつてゐた。さうでなくつて、何うして、昨夜かの女にあつた金を呉れるやうなことをしやう。また、いよく田舎をよして東京に来るつ

もりなら、借金も出来るだけ出してやらうなど、言つて呉れるやうなことをしやう。Tだとて、決してかの女を思はぬのではない。ただ、その思ひ方が普通の色戀とは違つてゐるのである。普通の色戀では満足出来ない心持にTはなつてゐるのである。そしてそれはお園にも——矢張同じやうに辛い苦しい色戀を経て来たお園にもよくわかつてゐるのである。何うすることも出来ないかれ等の戀ではなかつたか。

何か言はなければならぬ。また言ひたいことも澤山にある。しかし、かれ等にとつては、それはお互ひに今言ひ出すことは出来なかつた。かれ等の戀は今の状態で満足して別れなければならなかつた。二人は大きな寺の中のぬけ路を、静かに黙つて歩いて行つた。淡竹の藪には、午前の日が朗かに照つて、雑僧が頻りに山門の前を掃いてゐた。

百一

停車場ではさう待つ間はなかつた。乗客の混雑した中、田舎の人達の何か聲高に話し合ふ空氣の中に半ば埋められるやうにして、碌々話もせず、別れをつける暇もなしに、匆卒に、

『ぢや、その中に……』

お大事に……』

かう言ひ交しただけで、Tはプラットホームから長い橋を渡つて向うに、お園は獨りで淋しく停車場前の広い通りの方へと出て來た。

停車場前の旅舎に寄つて、ちよつと話して行かうとさつきは思つたのであるけれど、さて獨りになつて見ると、それも詰らないやうな、あの上さんの顔を見たところで爲方がないやうな氣がして、そのまま真直に歩いて行くのは止して、寺の裏の路を町はづれの方へと折れて行つた。

種々なことがごたくと一緒になつて、かの女の頭の中に浮んで來た。昨夜、床に入つてからしたゝかに泣いたこと、流石のTも持餘して終には黙つて腕組みをして床の上に坐つてゐたこと、あの女があつても好いから、何うか一緒に東京に伴れて行つて呉れと縋つて頼んだこと、Tがいろ／＼にそれが不能であることを説いたこと、(さうした戀をするのは、却つてお前のために好くない……。かう僕が言ふのはお前を捨てるのではない。却つてお前を拾ふのだ……。お前のためを思ふからだ……。それは、僕の言つたことは、あとになればわかるから。)とTが言つた言葉、それに對して、かの女はかなりに思ひ切つたことを言つた。それは、(表は立派に眞面目なことを言つて、裏では女に縋られない、捉へられないためのづるい手のやうなものではないか。)といふやうなことも言つた、それはさうでないのは、かの女にはわかつてゐたのであつたけれども、それまで言はずにゐられないやうな止み難い戀心であつた。Tはその時深い深い溜息をついた。その溜息——その深い溜息と凝とかの女を見たその眼とは、今でもは

つきりとお園の眼の前に歷々と印象されて残つてゐた。『矢張、駄目なんだね。一度犯した體の過失は、何うしても容易には贖はれないんだね。兄妹になつて世話をしやうと思つても、兄妹ではゐられないんだね。』かうTは笑ひもせずと言つて、(まだ、今はかの女は一人だから好いけれども、他にきまつた男と言ふものがないのだから好いけれども、こんなことは早くやめて、本當にお前のためを思つて、本當の兄妹になつて世話をしやう。そしてかうした過失を償ひたい。)といふやうな意味のことを言つて、そしてまた溜息をついた。

さうした戀——戀と言つて好いか、それとも戀ではなしに愛と言ふべきものか。それは何と言つて好いかわからないけれど、兎に角かうした經驗は、これまでお園には會てなかつたことであつた。涙と歡樂とが忘れ難く體に絡み着いて、その涙が單に悲しいとか、思ひのまゝにならないとかいふ涙でなく、歡樂もまた楽しいとか、嬉しいとかいふ普通の色戀の歡樂ではなく、心と心が融け合ひ、魂と魂とが觸れ合ふやうな不思議な感じのするものであつた。何んな色戀でも、女の男に對し、男の女に對する一つの異つたものから自然に生じて來る喰違ひと言つたやうなものがあるものであるが、さうした心持はつひにお園に起つて來なかつた。お園は從順な、從順な羊であつた。かの女はTの言つたことを何も彼も點頭いてきいた。悲しいけれどしかも感謝なしには聞かれないやうな涙が終夜床を漂はすばかりにした。『さうですね。本當にちやんとした夫を持たなければ駄目ですね。』かう心から痛感したやうにして

お園は言つた。

百二

種々な思ひの果てはほんやりしたやうになつて、お園は朝の田舎道をうかうかと歩いて行つた。醫者を乗せた俵がかの女を追ひ越して行くのも、向うから米俵を積んだ運送車がやつて来るのも、時間に遅れたらしい小學校の女生徒が泣きさうにして急いで歩いて行くのも、何も彼もかの女の眼には入らなかつた。悲しいやうで、辛いやうで、そしてまた喜ばしいやうな氣分が一緒になつてその胸に簇つて來た。

(あそこの上さんは、かの女がさうした東京の男と一緒に出て行つて、一夜家を明けたことをN屋の主人に話すに相違ない。……だけど、そんなことは構はない。何かぐつぐつ言へば、その時は此方から暇を貰つてやるばかりだ。本當に、そんなことは小さなことだ。)こんなことをお園はひとり口に出して言つて見た。

かう思ふと、Tが言つた言葉、(眞面目で、本當でありさへすれば、屹度新しい運命が来る。本當の生活が来る。それは今から豫言して置いても好い。)と言つた言葉が、殊に、はつきりと、色濃く、種々な多くの言葉の中に浮び出して思ひ出されて來て、それがかの女のこれからの力綱でもあるかのやうに感じられた。(實際、それで新しい運命がひらけなければ、それは此身がわるいのではない。それこそ本當に、

此身に運がないのだ、それだけの運なのだ。それは何うも致し方がない。だから、そんなことは思はず、少くとも自分だけは、その眞面目な力綱に縋つて、これから生れ變つたやうに本當にならなければならぬ。)かう思ふと新しい心が鮮かにかの女の胸に湧き出して來て、何も彼もはつきりと解つて來たやうな氣がした。次第に、麗らかな朝のやうな晴れ晴れした氣分になつて行つた。

會つては、さびしい處、さびしい心細い他郷と思つた松原も、今日は麗かに朝日にかゝやいて、そこに入つて行く折れ曲つた路も、かの女の心を惹くやうに思はれた。小鳥は好い聲を立て、鳴いた。

をりく、疎らになつた松林の間からは、農村の家々の屋根が見えて、鶏犬の聲が別天地でもあるかのやうに、のどかにあたりに聞えた。靜かな靜かな心持にお園はなつた。

村に添つた畠では、手拭をかぶつた百姓の若い妻が一人でさびしさうにして刈遅れた麥を刈つてゐたが、をりくその鎌にきらりと日が光つた。

と、見ると、かの女の歩いてゐる路の向うの路から、一人のこれも矢張まだ若い農夫が、鎌を持つて此方にやつて來るのが見えた。初めは別に氣も附かなかつたが、それはその畑に獨りでさびしく麥を刈つてゐる女の亭主であるらしく、やがてその傍に行くと、何かわからないスラングで聲をかけた。若い妻も鎌を止めて、立つてそして何か返事をした。

それは何でもないことであつた。來やうと思つた處に人が來て遅くなつたといふやうなことであつた。

しかも、それでも、それだけでも、さうした小さいシーンだけでも、お園には羨ましい生活のやうに見えた。單純ではあるが、純で、本當で、何の心の蟠りもない楽しい生活のやうに見えた、しかも會つては、さうした生活をつまらない生活と思つたかの女ではなかつたか。あゝして深い男女のことも、世に稀な歡樂のあることも知らずに、平々凡々に暮してゐる生活もつまらないと思つたかの女ではなかつたか。いかに淺はかに自らを知らないかの女であつたらう。お園はかう思つて、立留つて、凝とその二人の睦しきを見た。

百三

妻は夫に向つて笑ひ懸け、夫は妻に向つて話し懸けつゝ、暫しは楽しい、心持の好きさうな姿をあたりの靜かな空氣の中にくつきりと見せてゐたが、やがて、その畠の右の隅の處に男が行つてサクサクと黄熟した麥を刈り始めると、女もそのまゝ元の位置に身を戻して、蹲踞み加減になつて、頻りに鎌を動かしてゐた。かれ等はかうして午近くまで働くであらう。畦から畦へと刈つては揃へ、揃へては並べ、並べてはまた刈るであらう。そして、午近くなつて、軽い疲勞と餓とがかれ等を涼しい木の蔭へと伴れて行くであらう。そこには土瓶に入れた水があるであらう。携へて來た辨當があるであらう。菜らしい菜とでもない麥飯も非常に旨く食べるであらう。こんなことを思ひながら、お園は猶ほちつとその若夫

婦の働くさまを見詰めた。

暖かい、寧ろ何方かと言へば汗ばむほどの日影が、明るく靜かに女の白い手拭の上に照つた。草藪の中には、蕨が既に木になつて、枝を出し、葉をひろけてゐるのがそこに雜つた。

かれ等とて、細かに内部に入つて見たならば、餘所目に見るほど楽しくもないであらう。姑とか小姑とか、その周圍のものに對する氣兼ねとか、さういふ浮世の苦勞は矢張その身のまはりに纏はりついでるであらう。しかし、少くともかの女よりは幸福である。かうして孤獨で、何も本當に擱んだものとはないかの女よりは――。

またしてもかうした悲しい考へが簇つて來さうに、涙ぐましい氣分が誘はれて來さうに思はれたので、お園はそのまゝそこを去つて、急いで歩き出した。

靜かな松原の中の路が猶ほ暫し盡きずに續いた。

やがてその松原がいくらか疎らになつたと思ふと、そこにふと錆びた小さな沼があらはれ出して來るのをかの女は見た。(はてな!)とお園は思つた。ふと昨日歩いて來た時にも、矢張かうした沼があつたかしらと思つた。あつたやうにも思へれば、無かつたやうにも考へられる。あの時は夢中で話をしてゐたので、それと氣が附かなかつたのかも知れないが、かうした沼なんかなかつたやうにも思はれる。

(路を間違へたんぢやないかしら?) いくらか胡亂になつて、お園はまた立留つた。

錆びた沼には、日が林を透して斜にさし込んで來てゐた。蘆や萩や眞菰の新芽がツンツン出てゐて黒く淀んだ水の上には、青いまたは鈍色をした藻が一面に浮んでゐたが、中には白い花の咲いてゐるのが見えた。向うの岸に田舟が一隻浮いてゐるばかりで、路をきかうにも、人の影はあたりに見えなかつた。唯、つたつて來た路が、長く沼に添つてうねくとめぐつてゐるばかりであつた。お園は困つてあたりを見廻した。

矢張誰もゐなかつた。さうかと言つて、さつき若夫婦のゐるところまで戻つて行くには、既に餘りに遠く來すぎてゐた。爲方がないので、お園は暫しそこに立盡した。

かの女はかうして十分ほどゐたが、ふと氣が附くと、かの女の來た路ではなしに、松林の中途から出て來る路を靜かに此方にやつて來る一つの中折帽があつた。まだ遠いので、何ういふ人か、その眉目はつきりわからなかつたけれど、兎に角次第に近寄つて來るらしく、好い鹽梅だと思つて、お園はそれを待つた。

百四

その姿は草藪のかけに、または松の影の濃淡の中に見えたり隠れたりして、次第に此方へと近寄つて來たが、眉目のいくらかはつきりして來た頃から、凝と眼をそぎ始めたお園は、いきなり其方へと歩き

出して、

『まア、杉山さんぢやありませんか？』

と思はず聲を立てた。

男はちよつと不思議さうな顔の表情をして、俄かにかう呼びかけられた女を見たが、すぐそれとわかつたらしく、

『ホウ、これはめづらしいところで。』

と言つて、やつぱりなつかしさうに此方へと寄つて來た。

『何うも貴方らしいと思つて、さつきから見えてゐたんですよ。』

杉山は莞爾しながら、

『それにしても、何うして、こんなところに来てるんです？』

『いゝえ、もう、私、此頃はもうA町にはゐないんですの……。今はね、ちきこの向うにゐるんですけども……』

『向うつて？』

『それ、そこに、河の下に料理屋があるでせう。あそこにあるんですけども……』

『あゝ、あそこに来てるのかえ。』かう杉山は言つて、『何時から？』

『つい、此間から。』

『あそこの方が面白いかね。』

『いゝえ、面白いとか、何とか言ふんぢやないんですけども、少し事情があつたもんですから。』

『……………』

杉山は何か言はうとしたが、それはよして、『そして、また何うしてこんなところを歩いてゐるんです？』

『昨日T町に用があつて行つて、遅くなつて泊つたんですの。ところが、路を間違へたんでせうかしら？ 何だか此處に来て見ると、昨日歩いて行つたところとは違つたやうですから、誰か人がるたら訊かうと思つてまご／＼してゐたんですの？』

『あゝ、それでは、右に行く奴を左に入つて来たんだ……』

『矢張、違つたんですね、それぢや——。何うも變だと思つたんですよ。昨日は、こんな沼なんかかなかつたやうに思ふのに、變だ！と思つて立つてゐたんですの。』笑つて見せて、『好い鹽梅だ、向うから人が来る。あの人に訊かうと思つてゐると、それが貴方だつちやありませんか。本當に不思議ね。』

『奇遇だね。』

『これで、二度、お世話になるわけね。』こんなことを言つてお園は笑つた。

杉山はすぐ先に立つて歩き出した。『あとに戻つても好いけれど、こゝを行つても、あそこ少し手前のところに出る路がある。その方が近い。』かう言つて、沼の縁を縫つたやうな、一面松原で、一面草藪の路をすた／＼歩いて行つた。

お園はそのあとにつゞきながら、

『貴方の家は、それぢや、この近所にあるんですか？』

『僕の家？ 僕の家は、これからまだ向うだけれど、そんなに遠くはないんです。』

『此間の家が——？』

『えゝ。』

『そんな方角になるんですかね。この間は、夜だつたから、ちつとも判らなかつたですけれども……ぢや、私は貴方の家のぢき近くにあるたわけですね。』

『あの料理店とは十町位しきや離れてはるませんよ、僕の家とは？』

『さうですかね、まア、不思議ね。』お園は思はずこんなことを言つた。

續いてお園は訊いた。

『今日は學校の方は？』

杉山は少し考へるやうにしたが、

『今日は學校は休みました。墓参りに来たもんだから……。』

『墓参？』

(誰方の?)とまで言はない中にふと念頭に浮んで来た考へをお園は自分で押へるやうにして、(もしそれは奥さんでは……)といふ表情をしてお園が見せると、

『たうとう亡くなりましたね、あれも……』かう言つて杉山は溜息をついた。

『奥さんですか？』

『え……』

『さうですか。』強く撲たれたやうにお園は言葉を長く引張つて、『さうですか、まあ……。ちつとも存じませんもんですからもうそんなにお悪かつたんですか。』

『いや、もう、駄目なことは、とうから駄目だつたんですけれど……』

かう言ひかけて止した杉山の言葉には、流石に新しい哀傷の情を離れることが出来ないといふやうな何處か淋しい悲しい調子が籠められてあつた。

『何時でしたの？ お亡くなりになつたのは——？』

『今日は四十九日です。』

『さうですか、まあ。それでお墓参りに……。ちつとも知らないもんですから……』杉山の方を見て、

『ぢや、あの時から、幾日も経たない中にお亡くなりになつたんですね。』

『さうです。あれが二月の末でしたから、あれから三十日ほど生きてゐましたかな。何うも爲方がないんです。』

『お可哀相にね。』

かう心から言つたお園は、若くつて死んで行つた細君を悲しみますにはゐられなかつた。ことに、女の方から戀をして、漸く思ひがとどいて、一緒になつたほどもなく、さうした不治の病ひに取つかれて、その愛した夫の傍から、否應なしに、永久に離れて行かなければならなかつた細君のことを思ふと、自分などは、まだどれほど合せだか知れないとお園は思つた。逢つたことのない人のやうにはお園には思はれなかつた。

『本當に、お可哀相でしたね。年はおいくつでした？』

『二十三でした。』

『まだお若いのにねえ。』

染々とした調子で『せめてお子さんでもあれば、思ひの種にはなつても、それでも形見になつて好う

御座んしたのに……。それさへなしにねえ。貴方もさぞ……」

「いや、もう何うも仕方がないんです。若くつて可哀相でしたけれど、何うもあの病氣では、しやうがありませんからな。唯、残念なのはもつと金でもあつて、あんなにわるくならない中に、海岸にでもやつて置けば、もう少しは生命が持ったかと思ふことです。しかし何うも仕方がないですよ。これも死んだ者の不運ですから。」

『でもねえ。』

「何うも、人間ツて言ふ奴は、しやうがないもので、生きて居る中は、そんなに思はずに、死んでから、いろく役にも立たないやうなことばかり思ひ出して……」

『それはさうですともねえ。』かう言つて、お園は少し間を置いて、

『でも、貴方が、よく御看病でも何でもなすつたでせうから、奥さんも喜んではお亡くなりでしたでせうけども……』

『……………』

何か言はうとしたが、新しい哀傷が胸に漲つて來たといふやうにして、杉山は口を噤んで了つた。松の微かに鳴る音がした。

百六

歩き乍ら、杉山は死んだ妻の末期の話などをした。未だにその姿は眼に見え、その聲は耳に残り、生前の数々の追懐は、何ぞと言つては身に纏つて思ひ出されて來て、常にその悲哀を新にするらしかつた。

『死んで了つてから、いくら思つてやつたつて駄目ですけども、生きてゐる中に、もう少し本當に思つてやれば好かつたと思ひますよ。本當に、妻のして呉れた半分も此方はしてやらなかつたんですから。』

かう言ふのをお園はすぐ引取つて、

『さう仰有やるのが本當なんです……。奥さんはそれで満足してゐらつしやいますよ。それこそ本當に、草葉の蔭から、かうしてお参りにお出でになるのを喜んでゐらつしやるに相違ありませんよ。』

かう言つたが、その自分の言つた言葉に引寄せられたといふやうに、急に涙ぐましい心持にお園はなつた。今更のやうに不仕合せな其身が、假令自分が死んでも、さうしたことを言つて呉れるものすらない此身が悲しまれて來た。

杉山もいつか染々した氣分になつたといふやうに、

『何うも人間はしやうがないもんですよ。生きてゐる中は、ちつとも本當のことは出來ないで、死んでから、始めていろく／＼なことがわかるんですから。』

『本當ですわねえ……。思つてゐましても、生きて顔を見合せてゐる中は、本當に思ひ合ふやうなことは出来ないもんですからね。……でも、貴方のやうに、さう仰有る人すら澤山にはありませんよ。それだけでも、奥さんは何んなに喜んでゐらつしやるか知れないんですよ。』

『まア、せめて、さう思つてゐる中だけでも本當に思つて、お墓参りでもしてやらうと思つてゐるんですけども……。何うも、死んで了つては、しやうがありませんよ。今になると、どんなに重い病氣でも、どつと寝てゐても、生きてゐて呉れた方が好いと思ひますからね。』

『それはさうでせうとも、人情ですもの。』

杉山は暫し黙つて歩いたが、やがてまた話をつゞけて、『不思議でした。死ぬまで私のことを心配して呉れて、いづれ一人ではゐないだらうが、何うか私の再生のやうな細君が出来るやうに、私が蔭ながら護つてゐるなんて言ふんでした……。それは氣はたしかでしたからね、死ぬまで……。あの病氣は皆なさうだつて言ひますね。』

『お可哀相にね。』

お園はかう言ふより他爲方がなかつた。愛した夫に離れて死んで行く女の悲哀が深く深く考へられた。生別、死別、世の中にはさうした悲哀は澤山にあるのである。合つたものは離れ、生れたものは死んで行かなければならないのである。かう思ふと、ふとTが言つた言葉が思ひ出されて來た。『何うしたつて、

人間は一人で生れて來たんだから、死ぬ時も矢張一人で死んで行かなければならないんだ。何んなに愛したものだつて一緒に伴れて行くわけには行かないんだから。』それは、人間の孤獨と言ふことを證據立てるためにTが言つたものであつたが、しかもそれが今實際の事實としてかの女の胸に浮んで來た。

『世の中は思ひのまゝにならないことばかりですわねえ。』

かう心から感じたやうにしてお園は言つた。

杉山にもお園の心が、態度が、姿が不思議にやさしくしほらしく映つて見えた。この前の時にも、(なんだ、酌婦ぢやないか。)といふ批判以上に何處か本當の女らしい氣分がしてゐたが、今は一層さうした感じが濃やかになつて行つてゐた。(酌婦にも、かうした眞面目な、素直な、本當な女があるんだな。)といふ風に杉山は思つた。

百七

沼はまだ見えてゐたけれども、ぐるりとそれを廻つて歩いて來たやうにいつかその大部分はあとになつてゐた。松原の中の路は猶ほ續いた。

草藪の中には、脊の低い山躑躅だの、山木瓜の花だの、名の知れない細かな白い花だのが雜つた。

『お寺はこんな方なんですか?』

暫く黙つて並んで歩いたあとでお園はかう訊いた。

杉山は點頭いて見せて、『もう少し行つたところですよ。』

『さむしい處ですね。』

『田舎ですからね。』

かう言つたが、ちよつと一ところ明いたやうに松の途絶えてゐる方を杉山は指さして、『そら、そこに、屋根が見えるでせう。そら、松原の中に杉の大きな樹がある、そのすぐ下のところに——』

『えゝ、えゝ。』

『あれがさうです。』

『御先祖からの？』

『えゝ、さう。』

年若くして死んで、かうした沼のほとりの松原の中の寺にさびしく埋められた細君のことが更に一層深い哀愁をかゝる女に誘つて來た。お園は訊いた。

『奥さんは、矢張この御近所の方でいらしたんですか。』

『いや、少し離れてゐるんです。河の上流二十里ほどの小さな町で生れたんですが、十二三の頃から、織物の出来る町に來て、それから縣の師範に行つたんです。』その頃を思ひ出すやうにして、『私が行つて

ゐた時分とは、三四年も後の卒業でしたけれど、出來の好い方で、卒業する時にも一番で出たんです。』

『ちや、よくお出來になつたんでせうね、惜しう御座いましたね……。何うしてまたそんな病氣が出たんですかねえ。』

『體はもとから弱い方でしたから、さういふ病氣のちき出さうな體格でしたから……。それに、學校は何うしても衛生がよく行届いてゐませんからな。』

『惜しう御座んしたね。』

次第に、杉の古い樹は近くなつて、寺の屋根も、それにつゞいた山門も、山門の傍にある鐘樓も、はつきりその前に指されるやうになつた。田舎にしては、かなり大きな寺であつた。しかもその周圍は依然として松原で、半ばそれに埋められるやうになつて見えた。

やがて近づいた山門の前には、墓掃除の番人が、其内職に線香だの檜だのを置いて置く小さな家屋が一軒ほつんとして立つてゐた。

その前に來て立留つた杉山は、

『この路を真直に行くと、村に出ますから……。そこを構はず行つて、』と教へかけると、それをお園は遮るやうして、

『何だか變ですけども……。お近附きにもなつてゐない奥さんですけども、何だかこのまゝ素通りして

は行かないやうな気がして來ましたから、私にもお参りさせて下さいましな。』

杉山はちよつと躊躇したが、すぐ、

『それは難有い……。死んだ妻も喜ぶでせう。何うかお参りして下さい。』

『貴方にもお世話になつたし……。また、今日かうしているくお話をうかがつて、何だかお参りさせて頂きたいやうになりましたから。』

『何うか、さうして下されば——』

で、杉山が線香を買ふために、その門前の小さな家に立寄るあとについて、お園もそこにあつた櫓や色花などを買った。

百八

頭を箒のやうにしてゐたその上さんは、學校の先生が一緒に伴れて來た此處等あたりに餘り見懸けない綺麗なお園を不思議さうにして見た。そして杉山の方に何か意味のありさうな笑顔を見せた。

それを杉山は見ても見ない振りをしてゐるが、迷惑とは思はないまでも、何處かかう調子の合はないやうな、きまりのわるいやうな、誤解されては困るやうな、さうかと言つてまた却つてそれを得意にしてゐるやうな氣分が、それとなくその心の周圍に起つてゐるのをお園は見た。お園は先に立つて、其處に

置いてある氏名の新しく黒く書いてあるあか桶を取つて、好いと言ふのを先に立つて、その傍の井戸端で水を汲んだ。桔槔の大きく上下する音がギイときこえた。

『方丈さんるたかや?』

かう杉山が上さんに訊くと、

『晝前はゐるたつけが、さつき、どけえか法事があるつて言つて出かけて行つたつけ。經讀むんけ?』

『いや、經は昨日、親類が來て上げて行つた筈だで、用はねえんだがな。』

『さうけえ、昨日來たのが、あれが親類けえ。あの年取つたのは、亡くなつた人のお袋さまけえ?』

『さうだ……。』

『先生さあ、何うして、一緒に來なかつた?』

『昨日は、何うしても學校が休めねえで、夜まで學校にゐたで。』

『さうけえ。』

線香を持つたり、花を持つたり、またお園があか桶に色花を持つたりして、山門から本堂へと眞直に、そこからまた右に本堂に添つて裏の林の中の墓地へと二人が並んで靜かに歩いて行くのを、上さんは見えなくなるまで見送つた。(そんなことはなかんべ……。親類のものか何かだんべ。あの先生は堅いだで、そんなことはねえ。)かう打消しながら、上さんは家の中に入つて行つた。

お園の眼にはところ／＼障子の破れてゐるしんとした寺の本堂や、鶏が二三羽餌をあさつてゐる他には誰もあたりに人の影も見えない庫裡や、庫裡の井戸のすぐ傍の物干棹に女の襦袢や腰巻のかけつらねて干してあるのや、二三本ある梅の木に實が澤山鈴生りについてゐるのなどが映つた。かうしたさびしい處で墓になつた人のことなどが脈々と思ひ出されて、つゞいて、かうしてゆくりなくその人の墓に詣づるのも何かの縁だといふ風にお園には考へられて来た。

裏は一面のひろい墓地で、杉の疎らな木立の中に、周圍の松原から雜つて入つて来たかと思はれる松などが多い墓石の中に點綴されてあつた。手も入れないで延びたまゝになつてゐる要垣や、半ば壊れたままになつてゐる墓の扉や、さうかと思ふと、新しい花崗石の立派な墓などが際立つてあたりに目に着いた。

やがてある墓の前に来ると、杉山はづか／＼とその中に入つて行つた。

『此處ですか。』

『えゝ。』

正面には、大きな舊い墓が三つも四つも並んで、その右の隅にそれと思はれる新しい墓があるのをお園は目にした。提灯は既に骨ばかりになつて、檜の青々としたのが半ば墓を埋めるやうにした。

百九

『かういふ處にお墓になつてお終ひになつてはねえ。』

いかにもその若い細君の短い一生に撲たれたといふやうにして、お園は其墓の前に行つて立つた。

杉山にも種々なことが思ひ出されて来て、今更に哀傷の念が湧き上つて来るやうに見えたが、さうしたお園の言葉にも調子を合せる餘裕はなく、黙つて持つて来た檜を花立の中に挿し、煙の颯つた線香をそのまゝ墓標の前に立て、さて水を灌いでから、一枚取つて水に浸した檜の葉を、さながら自分の悲哀のシンボルか何かのやうに、びたりと新しい墓標に貼けたりして、長い間躊躇んで瞑目して手を合せた。

後に立つて凝とそれに見入つたお園の胸には、やさしい男の本當の心が深く染み渡るやうに全身に漲つて感じられて来た。購ひ難い、または見難い尊い心の世界にその身が入つて行つたやうにも、または見えないところに或る萬能の佛のやうなものがあつて、ゆくりなくかうしてかの女をこの墓に伴れて来て呉れたといふやうにも……思はずかの女も手を合せた。

杉山は容易にその墓前から立つて来なかつた。瞑目して手を合せてゐるさまは、さながら墓の中の魂に對して親しげに物を言つてゐるやうにも、または生前のさま／＼のことを思ひ浮かべて深い悲哀に浸

つてゐるやうにも見えた。線香の煙は風もないのに高く颯つた。

やがて身を起して立つて此方に來た杉山に代つて、今度はお園が色花を手向け、線香を立て、水を灌ぎ、同じやうに蹲踞して、そして深く額に手を合せた。と、他人ではないやうな、または一度も逢つたことのない人とは何うしても思はれないやうな、姉か妹か、それとも亦親しい友達か何ぞのやうな深い魂の一致が何處からともなくあらはれて來て、軀も心もすべてその墓に引寄せられるやうな氣がした。熱い熱い涙さへ總身に溢れ出して來た。

お園は容易にその墓から離れて來ることが出来なかつた。

で、尙暫らくその墓前に手を合はせてゐたが、やがて靜かに立つて此方へ戻つて來た時には、その眼が、深い睫毛が涙に濡れてゐるのを杉山は見た。杉山も心から感謝せずにはゐられなかつた。

『難有う……佛も喜んでゐますよ。それ御覽なさい、その證據には、線香の煙があんなに高く立つてゐる！』

かう言つて、杉山は墓標を細く取巻いて颯つてゐる線香の方を見た。

お園は何か言はうとしたが、俄かに悲しくなつたといふやうにして、脇を向いて、手巾で眼を拭いた。暫し沈黙が續いた。

しかしそれもやがては始めの靜かな心の状態になつて行つたといふやうに、お園はあたりを見廻して、

『皆なこれは、御先祖のお墓？』

かう杉山に訊いた。

『いや、これは親父の墓です……。それから、此方のがお袋の墓です……。』

『それぢや、もう貴方には御兩親ともゐらつしやらないんですか？』

かう始めてそれと知つたといふやうにしてお園は言つた。

『え、親父には六歳の時に別れましたし、お袋には五年前に死なれました。』

『まア、さうですか……。』

『全くの一人ほつちですよ、僕は——』かう杉山はさびしさうに言つた。

百十

『さうですか。お一人きりなんですか。それでは一層おさむしいんですね。』

『貴方は？』

今度はかう杉山が訊いた。

『私も父親には早く死に別れました。母はまだ居りますけども、ゐてもゐないやうなんですから。』

『何うしてですか？』

『父が死ぬと、間もなく他へ嫁いて了ひまして、別に子供などもありますから。』

『さうですか、それはお氣の毒ですね。』

『十二三の時から、此間、お話した温泉場へまるつて、そこで大きくなつたやうなもんですから……。』

『御きやうだいは？』

『兄が東京に出て、何うやら彼うやらしてをりますけれど、——田舎になぞゐないで東京に出て来い。いつでも世話はしてやるからと言つてよこすんですけども、矢張、嫂もあり、子供もありますからね。』

『矢張、親に早く別れたのが不合せですねえ。』

『本當で御座いますよ。』

『僕なんかでも、父親に死なれたことが、かうして田舎に埋れて了ふ大きな動機になつたんですから。』

この話をしながら、二人はその墓地から出て来た。あか桶は矢張お園が持ちながら、山門から出ようとする時、杉山は、

『本當に難有う御座いました。佛はどんなに喜んでゐたか知れない……。』

『いゝえ……。却つて御迷惑だつたかも知れせんね。』

『そんなことはありませんよ。』かう杉山はいくらか笑つて見せて、

『まだ、當分、あそこの料理屋にゐるんですか。』

ちよつと考へたお園は、『何うなりますか、わかりませんが——ことに由ると、急に東京に行くかも知れませんが、大抵はまだあそこにゐるつもりです。あそこは客分のやうにして來てゐるんですから、いつでも出て行かうと思へば、行けるんですけど。』

『知つてゐる人でもあるんですか、あそこの料理屋の人が——？』

『いゝえ、さうでもないんですけども……。』かう言つてあとを濁したお園は、ふとあのN屋の主人の

ことは、初めはこの杉山から聞いたのであつたといふことを思ひ出して、變な氣がした。

もうわかつてゐるから好いといふのを、杉山は強ひて一緒に、誤り易い二筋道のわかる角のところまで送つて來た。

『ぢや、その中、屹度またお目にかゝりますよ。近いんだから……。』こんなことを言ひながら杉山は前を指さして、『この路を眞直に行きさへすれや間違ひはありません。村に入つても何でも、眞直に行きさへすれば、あの料理屋のある少し手前の大通りに出ますから。』

『難有う御座いました。』

かう言つてお園は別れた。

お園は清々したやうな氣になつた。また好いことをしたやうな氣もした。何の欲望もなしに、心からその細君を悲しみ得たといふことは、渺からぬ快感をかゝる女に誘ふに十分であつた。何だか自分が平生

の心の位置からは一段高いところに身を置いたやうにも、またはかうした忠實な、まことな心でるさへすれば、何んなに辛い世の中をも正しく安心して渡つて行かれるやうにも考へられた。(さうだ……かうした正しい心を持つてゐるさへすれば、何んな運命に此身がなつたつて、それは悔やんだり嘆いたりすることは無い。世間は皆な親類にも友達にもなる。)かういふ風にも思はれた。この路を眞直に行きさへすれば間違ひはない。村に入つても何でも眞直に行けばひとり手に大通りに出ると言つた杉山のさつき言葉も、單に道を教へたばかりではないやうな氣さへした。お園は新しい力を得たやうにしていそいそとして歩いた。

百十一

それから月日は経つた。

蚊の多い夏もすぎ、松原に初茸の出る秋も来た。河を上下する帆影の上には、靜かな色ある平野の雲が靡きわたつた。

脊戸の小さな川の畔りには、水引の細かに赤い白い花が點綴され、澄んだ浅い水に臨んで農夫が鎌や鋤を洗つてゐるのなどが見えた。夕炊の煙は、新しい茅葺の家から細く颯つた。

あたりには別に何も變つたものはなかつた。T町の製粉會社の煙突は依然として西風に靡き、汽車は

絶えず往來し、K町に向つて工事中の鐵道工夫の鶴嘴の音は次第に松林の中を進んで行つた。やがて收穫は終つて、野には靜かな冬が来た。ある朝は霜が白く置いた。

お園は矢張依然として、その河下の料理屋に客分として働いてゐた。しかしN屋の主人のやつて來るのは此頃ではもう元のやうに繁くはなく、何處かに一軒ちやんとした家を構へてやるといふ相談も、女の方から打込んで行かないために、そのまゝ中止といふ形になつて了つてゐた。

『世話して呉れるツて言ふんだから、世話して貰つたら好いちやないか、園ちやん！』かう上さんが勧めるやうにしても、お園は成るだけその羈絆から離れることにのみ心を注いだ。

『何うして、さうなの？』

かう上さんが訊くと、

『だつて、上さん持の男に世話になるのはもう懲々ですよ。』

かう言つて、お園は成るだけその關係を薄くするやうに、やうにと心がけた。その上さんも、亭主も後にはお園の心持を知つて、無理にN屋の主人に押附けるやうなことはしなくなつた。

しかし夏の末頃に、矢張その關係で——N屋の主人が、餘りに執念く纏つて來るので、一度は思ひ切つて國に歸るなり、東京に出るなりしやうと思つたことがあつた。しかしその時も料理屋の亭主の盡力と、お園の客扱ひの上手なのに打込んで、何うしても手離したくないといふ上さんの希望とで、N屋の方

の話は、何うにか彼うにか、すつかり切れた。別れたといふまでには至らなくとも、兎に角餘りにしつこく此方の自由を縛らないことを條件にして、そのまゝ再びそこに腰を落附けることとなつた。

しかしお園がそこに腰を落附けるに就て、それ以外に、最も有力な大きな理由があつたといふことは、それは亭主も上さんも少しも知らなかつた。

お園は今、考へて見ても、不思議な氣がした。自分の意志とか、または自分の希望とか言ふものではないに、さうした自然の運命が最初からチャンとそこにさうして機縁の熟するのを待つてゐたやうな氣がした。そして山の旦那にしても、Tにしても、またはN屋の主人にしても、かの女がさうした自然の運命の中に入つて行くために、わざとくその前にあらはれて来た人物のやうにかの女には思はれた。杉山にあの松原で逢つたといふことも、あの松原の中の寺の墓に詣でたといふことも、またはそれより以前に、あの舟橋の畔りの茶屋で邂逅したといふことも、後から翻つて考へて見れば、皆な一つ一つ意味があつて續いてゐる運命の繪卷であるやうにしか思はれなかつた。

百十二

その料理屋を捨て、東京に出るなり、國に歸るなりしなかつた一つの原因——それは始めは夢のやうな空想でもあり、自分でも馬鹿馬鹿しいと思ふやうなものでもあつたけれども、しかも後になつて考へ

て見れば、矢張見えない處に不思議な運命の糸のやうなものがあつて、それが微妙にかの女の心なり境遇なりを支配し且つ操りつゝあつたことが知れた。

(観音さまにでも手を合はせて頼むやうな心の蘇生)が、その時以來かの女の胸に新しい芽を出した。そして其新しい芽が萌え出してからは、其心の周圍にあるあらゆるものゝ影が、皆な異なつた色彩と意味とをかの女の心の上に齎して來た。Tにわかれて歸つて來たのも、其歸途に路をまちがへて杉山に逢つたのも、其亡妻の墓に詣でる氣になつたのも、それから度々杉山に逢ふ機會が出來て行つたのも、皆なその新しい(心の蘇生)に由つて、ひとり手に起つて來た不可思議な奇蹟のやうな氣がした。

(信じ得れば、曲つた心が出て來ない。わるいことが出來ない。唯それだけで好いのだ……。それで新しい道が開ける。)かう言つたTの言葉が、いろいろの事件に遭遇すればするほど、力強い意味を着けて來るのをお園は感じた。實際今までのかの女は、かの女の自身の心をすら完全につかむことが出來なかつたのではないか。自からの欲する心に迷つて、何方に行つて好いかすらわからなかつたのではないか。唯、かしく利口に立廻りさへすればそれで好いと思つてやつて來たではないか。そして今日まで何等絶るべき力綱を得なかつたのも、皆なその爲めではなかつたか。

N屋の主人の問題にしても、その新たに得たまことの心を持つて接して行つたがために、深い暗い淵に陥らずにすんだばかりでなく、N屋の主人をさへそこから浮びあがらせる事が出來たやうにお園には

思はれた。『だつて、お上さんがあるぢやありませんか。お上さんのことをもう少し考へてお上げなさい。』かうした言葉は、戀に盲目になつた男の眼を開くには十分でなかつたにしても、無理に壓迫して來る男の心を防ぎとめる楯としてほ、有効に役立つた。

『だつて、私がイヤならしやうがないでせう。』ある日、突然かう言つたが、その言葉は、N屋の主人でも誰でも容易に突き破つて來ることが出來ない強さを持つてゐた。お園はさうした言葉を平氣で口にすることが出來るやうになつたかの女を驚いたやうな心持で凝と見詰めた。さうした今と比べて、いかに昔は愚かであつたか。いかに自分といふものを本當に考へてゐなかつたか。唯、自分のために怒つたり泣いたり恨んだりばかりして本當に自分といふものゝ價値を考へずにやつて來たか。(成ほどそこち新しい道が開けて來る。)折角つかまへたその心の一筋の綱を、今度こそは容易に放すやうなことはすまいとお園は思つた。

其後度々お園は杉山に逢つた。杉山が同じ學校の同僚と一緒にその料理屋に來たこともあれば、お園が杉山の家近くまで一緒にかれを送つたこともあつた。成ほど杉山の家はそこからさう遠く離れてはゐなかつた。篠竹の繁つた川の土手の上を二三町で下りて、ひろい田圃を一つ越せば、もうそこは杉山の村であつた。

百十三

一時は同化し難き他郷、素氣のない深切氣のない土地の風俗、情味に乏しい田舎訛り、とてもこんな處には長くは居られないと思つたこともあつたが、その思つたことすら不思議に感じられるほど、此頃では土地の空氣に一種のなつかし味を持つことが出來るやうになつて來た。

潤々とした平野も、緑の深い松原も、その間に點々として散在してゐる村落も、今はもうさびしいといふ感じをお園には起させなかつた。外形と違つて、この地方の人達は存外暖かな心の持主であるといふことなども次第にお園には飲み込めて來るやうに思はれた。これと言ふのも、その杉山といふものが、ゆくりなくかの女の前に現はれて來たためであつて、N屋の主人だけでは、かの女は決してさうした心を起さなかつたに相違ないのであつた。

逢つたり話したりする機會は次第に多くなつた。それはかの女に取つても不思議に、或ひはあの松原の中の寺の墓の魂が夫をさういふ風に導いてゐるのではないかと思はれるほどであつた。かれ等はさうしたことについては一言も打明けて語らず、女の方からもさうした意味を持つた流盼ひとつ遣はなかつたけれども、それでもさうした約束は、あの舟橋の橋の袂で相見た時から、または闇の土手の路を歩いて來た時から、ちやんと出來てゐて、たとへ一時は離るゝことがあつても、いつかはその運命の轍の中に

入つて來ずには居られないやうに思はれた。

かの女はその後二三度その松原の中の寺に獨りで墓參に行つたことを思ひ出した。何のために、さういふ氣を起したか？ それはお園自身にもよくわからないやうなものであつた。或ひはその墓の魂が無意識にかの女を引寄せたといふより他爲方がないやうなものであつたかも知れなかつた。三度目に行つた時には、その寺の山門の前の家の土さんとも懇意になつて、種々杉山の家のことだの死んだ細君のことだのを詳しく聞いた。土さんは土さんで、『あんたは何處にゐるだア。親類にでもなるんかね。』

『いゝえ、別に——』

かう言つてお園はぢき近所にゐるといふ話をした。

『はア、さうけえ。それぢや、杉山さんの親類ツて言ふ譯でもねえんだね。』こんなことを言つて、土さんはいくらか笑ふやうにしてお園の顔を見た。

さういふところから噂に立てられたか、それともまた杉山と一緒に飲みに来る友達の問題になつて、そして評判に立てられて行つたが、二人の間には、まださうしたことは少しも言はれたり話されたりしてゐないに拘らず、世間ではそれ以上に、何の彼のと色濃く二人を觀察した。

『お前さん、本當？』

ある時、料理屋の上さんはかうお園に向つて訊ねた。

『何うして？』

『だつて、皆なそんなことを言ふからさ。』

『さう——？ だつて、私、そんな話を杉山さんからされたことはないわ。』

『ぢや、お前さんがさうでなくつても、向うがさうなのかも知れないよ。お前さん、望まれてゐるのかも知れないよ。』

『さうですかね。』

などとお園はわざと平氣で言つた。

百十四

この噂は最初は單なる噂であつたけれども、いつかそれは事實となつて二人の間に現はれて來た。

その年の秋には、近所の人達は、最早杉山とかの女の間を知らないものはなかつた。あるものは、『杉山さん、堅いのに、何うして、あんな茶屋女なんか迷つたんべ……。惜しいことをしたなア。魔がさした。』など、言つた。ある者は、『でも、あの女、あれで中々面白い所がある女ださうだ……。茶屋女などとは思へないやうなところがあるさうだ……。何でもあゝなつて行く徑路にも面白いロマンチックな物語があるんださうだ。』などと言つた。わるく言ふものもあれば、好く言ふものもあつたりして、一時は

N屋の主人にしても、さういふお園の堅い決心を何うすることも出来なかつた。二人の間には、ある時、次ぎのやうな會話が繰返された。

『ぢや、何うしてもさういふ決心をしたといふんだね?』

『え!』

『何うしても、それぢや俺の世話にはならないといふんだね?』

『え……。濟みませんけれども、さういふことにして頂きます。私は私で、何うしても身をきめなければならぬと思ひますから。』

『それも好いだらうけれど、學校の教員の女房などになつて、それで、お前は満足してゐられるのかえ?』

『それはやつて見なければわかりませんが、何うなるものかわかりませんが、兎に角、今度はさうしてやつて見ようと思つてをります。いろ／＼艱難もあれば、思ひ通りに行かないやうなこともあるのはわかつて居ますけれど、何うかしてそれは貫いて行つて見たいと思つてをります。何處に行つたつて、思ひ通りには行かないのはわかり切つてをりますけれど……。』

『一體、何うして、そんなことを考へ始めたんだね?』

かうN屋の主人が訊いた時には、『つく／＼、今までのやうな生活に懲りたのです!』かうお園は遠慮なく言つて、『今までは、餘りに、何も判らずに暮して來ました。男に惚れたり、惚れられたりするのを唯好いことにして、夢中でやつて來たのです。まア言つて見れば、何も彼もわからなかつたのですね。行き當りばつたり右に轉んだり左に轉んだりしてやつて來たんですね……。しかし今はやつと目が覺めたやうな氣がしました。ですから、後生ですから、新しい生活に私の入つて行くのを許して下さい。』

『でも、あとで後悔するよ。とても長くはつゞきはしないよ。』

『そんなことはありません。』

かうお園はきつぱり言つた。

N屋の主人との關係は、旦那と圍ひ者との關係ではなかつたけれど、主人が容易にお園を手放さうとしないので、かなり以後まで種々のごたごたが残つた。しかし初めはN屋側で、何の彼のと言つてお園を壓迫するやうな形を取つてゐた料理屋の亭主や上さんにも、次第に二人の心持がわかつて來たと見えて、後には却つてかれ等のために一方ならず骨を折つて呉れるやうになつた。

『本當に、N屋の亭主はしやうがないな。男だもの、その位のこととはわかりさうなもんだがな。惚れた女なら、一層さうして清く承知してやらなければならぬんだがな。それも、女が男の目を盗んで、

わるいことをしたとか、他に男を拵へたとかしたのなら、それはまたそこに理窟もあらうと言ふものだけれども、丸で、さういふ汚ないことはないんだからな。何うかして、さうした真面目な生活に入りたい。男一人女一人の正しい道に入りたいと言つて、それからさういふ心持になつて行つたんだからな、後護たいところは、女にも、杉山さんにも少しもないんだからな。N屋にしたつて、女から、さう言はれて見れば、是れは何うもしやうがないぢやないか。……惚れた女なら、一層さうぢやないか。』料理屋の亭主はある時こんなことを上さんに言つた。

百十六

ある日お園は東京のTから長い長い手紙を受取つた。

それは、この間、杉山との話をちよつと知らせてやつたその返事であつたが、それには、その話に對する、喜悅の情が溢るゝやうに現はれてゐるのをお園は見た。Tは書いた。——たうとう時が來ましたね。私が貴女のために望んだ時が。男と女が本當に入つて行かなければならない生活が。更に言ひ換へれば、私と貴女との間が本當に兄妹として呼ばるゝ時が……。私はその手紙を見て、何んなに喜んだか知れませんが。つまり、あの時、私が言つたこと、私が豫言したこと、その言葉は時を移さず、直に運命となつてあらはれて來たのでしたね。實際、私の言つたことは間違ひはなかつたでせう。ちやんと、正し

い者の前には、正しい道が開けて來たでせう?……何うか、これを忘れずに、今までの艱難、今までの經歷、今までの辛勞は、皆なさうした正しい本當の生活に入る道程であつたといふことを忘れずに、益益その心を磨くやうにして下さい。折角つかんだものを決して離さぬやうにして下さい。今までの貴女の生活を恥かしいとか卑しいと思ふには及びません。何んな生活でも、過去の生活は過去の生活として立派に生かして行かねばならないものですから。

——杉山といふ人には、私もその中行つて逢つて見たいと存じてをります。兎に角あの歸りに、その人に逢うたといふことも、奇遇以上の奇遇と言はなければなりません。それに、N屋の主人との話を貴方も隠さず、杉山といふ人も、それを知つて、別に世間の普通の人達のやうに、大問題にしなかつたところに面白いところがあると思ひます。公明正大といふ徳は、兎角、男の専有物で、女性には由來あまりないものですけれども、今度といふ今度は、貴方もその徳の大きいことを悟られたであらうと思ひます。互ひに信する心持さへあれば、何んな邪魔が入つて來たとて、それはちつとも恐るゝことはありません。そしてその互ひに信するといふことは先づ此方から信するといふことから完成されて行くのですから、それを忘れないやうに。

——N屋の主人に對する貴方の態度も、立派だつたと思ひます。實際、本當のもの、虚偽でないもの、好い加減でないものほどそれほど力強いものはないのですから。今度は、貴方も十分にそれを理解するこ

とが出来たでせう。つまり誰れに對しても、本當で、そして深切であらねばならないといふ心持を持つことが肝心なのです。それに對して刃向つて來る心はない筈ですから。——いづれ、その中話がすつかりきまつたら、また改めて知らせてよこして下さい。私も是非一度は行つて杉山といふ人にもお目にかゝりたいと思つてをります。N屋の主人の問題でも、もし話が面倒になつて、中に入るものでも必要な場合には、いつでもさう言つておよこさない。私は決してそのために盡力することを厭ひませぬから……。

——何は措いても、目出度い、よろこばしいことと思ひます。いづれ、詳しいことは後便にて申上ぐべく、先は……。

百十七

お園は杉山がかの女に初めて將來の話をした時のことをり／＼思ひ出した。それはその松原で逢つてから三月ほど経つた夏の暑い夜で、その時も、杉山はやつぱり客として酒を飲みによつて來たのであつたが、突然、杉山は眞面目にその話を持ち出した。

『……………?』
持ち出したあとで、緊張した心の態度で、杉山はその答を待つた。

『……………?』

お園は黙つてゐた。

『何うだらう? 本當のことを言つて呉れませんか。』

『……………?』

お園は漸く、『何うして、そんなことを仰有るんですの?』

『別に、理由はないんです。此間、あそこで逢つた時から、もうさういふ氣がしてゐたんです。死んだ妻が墓の中から特に貴方を選んで呉れたやうな心持がして爲方がなかつたのです。それから、自分でも種々に考へて見たし、これからの將來を何うせ一人で暮すことも出來ない身である以上、是非とも貴方に來て貰ひたいと思つたんです。』

『……………?』

お園はまた黙つたが、すぐ思切つて、『でも、私にはいろんなことがあるんです……。それをお聞きになれば、すぐ厭になつて了ふやうな事があるんです。』

『そんなことは大丈夫です。これまでに貴方にあつたこと、また、現にありつゝあること、そんなことを私は決して問はないつもりでゐます。それよりも、何うしても、貴方が離れられない伴侶がありは』

しないかと思つて、それを恐れてゐるんです。』

『……………』

流石にお園はそれを言出すことを躊躇したことを思ひ出した。また、つゞいて、思切つて、N屋の主人との關係を話した時には、流石に杉山も思ひもかけないといふやうな顔をしたことを思ひ出した。暫し二人の間に沈黙があつた。

杉山はやがて言つた。

『で、それが、何うなんです？ 貴方の心がそれから離れられないのですか？』

『そんなことはありません。』

かう言つてお園はその事情を詳しく話した。

『そんなら、何でも無い。そんなことは何うでも好い……。そんなことは故障にも何にもならない。』杉山は存外平氣で、益々その話を進めたのであつた。

否、そればかりではなかつた。その夜の一二時間は、かれ等に取つて、眞面目な、淨い、互ひに心のやさしく細かく交錯するやうな時間であつた。お園は男から男へ移つて来たこれまでの生活のことを話せば、杉山は杉山で、あの土手の闇の路を歩いた時の話などを持出した。『たしかに、さうですよ。さういふ運命にちやんとなつてゐたんですよ。でなくつちや、あの四十九日に、あの松原の中で、貴方に

ばつたり逢ふやうなわけがない。』さうした話は、その夜、二人の間に盡きずに出た。

『でも、奥さんの一周忌をすませてから、ね……。さうでなくつては、何だか私は氣がすまないから。

そして、その中には、N屋の方もすつかり綺麗にして下さいますから。』かうその時お園は眞面目に言つた。

その夜は月が美しくキラキラと川水に光つて、遅くまで二人は欄干に凭つてそれを眺めてゐたことを思ひ出した。

百十八

それから種々のことがあつたことを續いてお園は思ひ出した。初めの中は、互ひにそれを内所にして置くことにしたが、いつ洩れるともなく世間に洩れて、N屋の主人にも知れ、料理屋の亭主や上さんにも知れ、女中達にも知れ、果ては杉山の學校の方まで知れて行つたことを思ひ出した。

ある期間は、そのために心配した。(學校なんか、何うでも好い。これだけのことで——別に、非難すべき缺點でも何でもないことで、それで此處にゐられないといふならば、東京くでも、何處へでも出て行く……) かう言つて、杉山は、その戀の申出の決して世間的のものでなく、また第二義的のものでないことを表明したが、しかしお園の身にしては、一緒になるならさういふことにならずに、穩かに一緒になりたいと思つた。お園はその頃、獨りで、よくそこから一里ほどある松林の中の觀音にお詣りに行つた。

『ちよつとお詣りに行つて來ますから……』朝、起きて、何事もなく、平常のやうに働いてゐると思ふと、かうお園は俄に思ひ立つたやうにして出懸けた。

『また、お参りかえ？』

後では上さんはかう言つて笑つた。

『あの観音さま、昔からあるにはあるのだけれども、御利益があるのかしら？ 此處等よりも却つて、遠方の人が知つてゐるので、さうかしら？ そんなに御利益があるのかしらと思ふことがあるがねえ。』ある時は、上さんはこんなことを言つて、参詣に行くものゝ多少をお園に訊いた。『参詣に來るッていふほど、お詣りに來るものはありませんね。』とお園は言つた。

しかも、その観音堂——昔は大きな寺の一部であつたらしいのに拘らず、今はその小さな堂しかなくなつたやうな、その小さい堂の御利益のために、その寺の住職が今は却て生きて行くといふやうな観音堂であつたけれども、それでもお園の爲には難有い値ひ難い佛であつた。それに、そこまで行く路が面白かつた。桃の實の鈴生りになつた林が連続したり、深い蘆荻の縁に割葦が喧しく鳴いてゐたり、松に埋れた小さな村に機を織る音がさびしくきこえたりした。お園は何ぞと言つては、そこに行つて手を合はせた。

しかも、お園は自分ながら自分の心の變つたのに驚かすにはゐられなかつた。あの戀心は何處に？ またあの嫉妬や虚榮は何處に？ 一刻も男に縋らずにはゐられなかつた心は何處に？ さうしたものは

今は不思議にもすつかり跡方なく消えて了つて、眞面目な、落附いた、正直な心のみが代つてその胸を領するのをお園は見た。男性に對して恨を持ち、復仇を持ち、皮肉を持ち、更に一步を進めて、男を玩弄具にしやうとした心などは、今は何處へ行つて了つたかと疑はれた。

観音さまの御利益か、それともまたかの女の眞面目な心の自然の賜か、その年の秋も半ばになる頃までには、次第に、さうした世間の噂もわるい方から好い方に變つて行つて、今は誰もかれ等の間をわらく言ふものはなくなつた。『さうだつてな、其前の上さんの四十九日にあの女に逢つたんだつてな。不思議な縁だとさ。』などと人々は言つた。

百十九

その冬も過ぎて再び春は來た。

お園と杉山との話は次第に進んで、その四月の先妻の一周忌をすませた後には、愈々公に式を擧げることになつた。近所でも今はその話を知らないものはなく、始めは反對した校長も、N屋側であつた料理屋の夫妻も、却つて熱心な賛同者となつた。

Tからも、これを祝ふ手紙が、猶ほ二度も三度も來た。

それは四月に入つてから間もないある日のことであつた。お園はいつものやうに、沼に添つたり松原

の中の路を通つたりして、その観音堂へとお詣りに出かけて行つたが、お詣りをすませてその堂前に唯一軒ある休茶屋の方へと戻つて来た時、かの女は其處に、かの女より前に、その向うの縁臺に腰をかけて休んでゐる三十前後のやつぱり茶屋女らしい年増をふと見懸けた。

始めはそれと氣がつかなかつたが、何氣なくその横顔をちらりと見たお園は、(オヤ!)と思つた。(お鶴さんぢやないかしら)と思つた。

それはお園が一昨年初めてこの平野に彷徨して、困つて、最初にT町のM屋に訪ねて行つた時に、もうそのM屋にはゐるに、男と一緒にA町に行つてゐると言はれた女であつた。(しかし他人の空似といふこともあるから。)かう思つて、お園はもう一度見直して見た。しかも何うしても見紛ふべくもないお鶴であつた。

思ひ切つてお園は近寄つて行つた。

『お鶴さんぢやありませんか。』

思ひもかけずその名を呼ばれて吃驚したといふやうに、また、餘りに思ひ懸けないので、ちよつとは誰れであるかゝわからないやうに、凝とお園の顔を見詰めてゐるが、漸く思ひ出したやうに、

『まア、園ちやんぢやないかね。』

かう言つて立上つて来た。

『さうですよ、園ですよ。温泉にゐる園ですよ。』

『まア、それにしてもよく私がありましたね。』じろじろとお園の顔を見ながち、『それも、國かなんぞで逢つたんなら、すぐわかるといふこともあるけれども、こんなところで逢はうとは思ひもかけないもんだから。』

『さうですともね……。それでも、私は、貴方がこの近所にゐるッていふことだけは知つてゐるんですけど……。それでわかつたんですけども……。』

これを切つかけに、かれ等の間には盡きない國の話が始まつた。お園が此方に来て初めて、M屋を訪ねた時の話の出た時には、『さうですかね。そんなことをちつとも知らないもんですからね。それはお氣の毒だつたね。』などとお鶴は言つた。

そしてすぐ言葉をついで、

『矢張、あの旦那?』

『いゝえ、もうとうに——』かう言つて、お園は今全くその人には未練も何もなくなつた話をした。それにひきかへて、お鶴は未だにそのM屋で出来た男で苦しんでゐるらしく、矢張、いろく心願の筋があつて、そしてこの松原の中の観音堂にお詣りに来たといふことであつた。

『A町ですか? 矢張——』

『いゝえ、今は、ぢき、この近く……』かうお鶴は言つたが、『それでも、去年の暮に、ちよつと國に行つて來ましたよ。』

『さうですか。それは好う御座んしたね。』二人の間には、やがてIの温泉場や、上さんや、その他いろいろの人達の消息などが盡きずに語り出された。

百二十

お鶴は種々なことを話した。五年振で歸國したので、その間には變つたことも随分多く、思ひも懸けない恩人が死んでゐたり、一度亭主にした男にぼつたりある處で邂逅したり、一時全盛であつたKといふ温泉宿が息子の道樂のためにすつかり零落してしまつたりした話が、それからそれへと盡きずに出たが、ふとある話をお鶴が始めると、それに關聯してひとり手に思ひ出されて來たといふやうに、

『何うしてます？ 今、あの人？』

かうお園は訊いた。

『矢張、今でも、あゝして女を引張つてゐますよ。……え、え、あのお芳なんかはとうの昔に捨てられて了つたんですがね。』かうお鶴は言つて、『今度もちよつと逢ひましたよ、富春亭で……。何でもあそこの上さんとも出來てゐるやうな話でしたよ。』

『家は何うしてゐるんでせう？』

『もう滅茶々々ですね。親父さんが死んでも、お袋さんの生きてゐる中は、まだあの人自由にないやうなところがありましたけども……』

『お袋さん、亡くなつたんですか？』

『去年の春でしたさうですよ。』

『さうですかね。まア、あの丈夫なお袋さんが……』

お園はその男とその母親を思ひ出さずにはゐられなかつた。かの女の多い戀の中で、一番無邪氣であつた戀、一番美しかつた戀、一番本當であつた戀、また一番別れるのが辛かつた戀、その戀の當體の男が、今も相變らず女を玩弄具にして、家の亡びるのにも頓着せず、待合のやうな小料理屋の上さんと長火鉢に相對して坐つて夢中になつてゐるといふ話を聞くのはかの女に取つて悲しいことであつた。その男のためにも、眞面目に觀音さまに手を合はせてやらなければならぬやうな氣がした。

『何うしてさう目が覺めないんですかね、男は？』

かうお園は染々言つた。何うか、さうした心の境遇から一刻も早く脱離して、本當の靜かな心持になつて貰ひたいとお園は思つた。(早く一人前の一家の主人になつて、きまつた細君を持つて呉れ、ば、それこそ何んなに嬉しいだらう)と思ふと、いろ／＼なことが思ひ出されて、涙が出さうになつて來た。

一時間以上も、二人はそこで話した。お園がその身の上話をした時には、始めはフム、フム、とただ平気で聞いてゐたお鶴も、次第にその物語に引寄せられたといふやうに、『それで、もう結婚するの？ フム』と言つて深く考へに沈んだ。

すぐ言葉をついで、『矢張、眞面目でなくつては駄目ね。正直でなくつちや……。いつまで経つたつて、——相手がいくら變つたからとて、矢張心は同じだから、人間は同じだから。』

『本當ですとも——』

かうお園は深く共鳴した。

お鶴にも、矢張、さうした男の苦惱があつて、この松原の中の観音堂——餘り世間には知られてゐないけれど、眞面目に信仰すれば非常に靈驗が多いといふこの観音堂へと參詣してゐるのであつた。それは晴れた靜かな、桃の赤い花が目もさめるやうに松の間を綴つてゐるやうな春の日であつた。二人は猶ほ暫くその茶屋の縁臺に腰をかけてゐた。

『世の中も變るものだが、人の心と言ふものも變るもんですね。』

こんなことを二人は話し合つた。二人はそこから少し來た松原の角で別れた。

——花袋全集 第八卷 終——

解 說

前 田 晁

大正六年の十月、作者が四十七歳の秋から『朝日新聞』に載せはじめた長篇小説『残雪』において、作者の藝術が其頂點に達したことは、今日、一般の定説となつてゐる。この卷に收められた三篇の長篇小説は、實に其前後に公けにされたもので、従つて、『残雪』における作者の心境を頭においてこれらの諸篇を見れば、極めて容易に作者の藝術生活におけるこれらの諸篇の意義が領得されるであらう。

三篇のうち、『二兵卒の銃殺』は『残雪』より一年早く、大正五年の秋から執筆して、その十二月に脱稿し、翌六年一月、書きおろしのまゝをすぐに單行本として春陽堂から發行したものである。

この書きおろしをすぐに單行本にしたといふことも一つの興味となつて、當時、この作に對する批評は可なりさかんに起つた。そして作者獨得の描寫の手法は大いに讃歎されたにもかゝらず、その

内容の方面において、非常に遺憾とされたところも少くなかつた。殊に主人公が脱營するに至る當然の根據ともなり背景ともなるべき筈の最も重大な兵營生活論が、殆ど作者に取り上げられてゐなかつた點と、主人公の性格がもと／＼脆弱魯鈍なために、この異常な事件を醸成したのであるのに、作者がその性格を病理學的に解剖してゐない點とが最も強調して非難された。

けれども、これは作者が思ひもかけなかつたところであつた。なぜなら、作者が描かうと志したところのものは、全くさういふ點ではなかつたからである。では、作者が描かうとしたところのものは何であつたか？ 外でもない、この作中における作者自身の言葉でいへば、「人間の持つた最も底のもの、最も深いもの、最も淫蕩なもの、凡てさうしたものの我等の生活を支配する大きな力」である。作者は實に其力を描かんがために脱營した一兵卒の心理を解剖したのである。

とはいへ、なぜまた此力を描くために脱營した一兵卒を主人公としたのであるか？ これには、しかし、特別の理由があつたのではなかつたらう。ただ此時たゞ／＼此作に描かれたやうな事件が實際にあつて、作者は其詳細を親友である或最高官衙の役人の一人から聞いたのである。そしてここに日頃懷抱してゐた考を創作として具體化する機縁を熟さしめたのである。現に春陽堂から出た初版本には、最後に此作の材料の出所を明らかにしたやうな一節があつて、その爲にといふわけでもなかつたらうが、役所の記録か何かによつて、それに潤色を加へ、想像を織り込んで行つたといふ痕も隨所に

見られる、といふ、當時、作者の痛いところを突いた非難などもあつたのである。その時、わたしはまた、この最後の一節の明らかに蛇足である所以を指摘したのであるが、作者も即座にあつさりこれを認めて、すなはち全集に收める時には、この一節を取除かうといふことになつたのである。

さて、材料はさうして得たのであるが、しかし、作者はこれをそのまま机上で仕上げたのではなかつた。ちやうど七年前の『田舎教師』の時と同じやうに、書き出すまでには、わざ／＼その舞臺となつた場所へ出かけて行つて實地踏査をしたのである。ただ今度の事件は、『田舎教師』の場合とちがつて、或ひは主人公の周圍の人たちに迷惑を及ぼさないとも限らないところがあるから、すなはち作者の遠慮で、わざと地名や何かはあからさまにしなかつたのである。が、今はすでに時も経つてゐるし、いささか理解に便するために、一二の地名を明らかにすると、脱營したM市といふのは仙臺であつて、放火の行はれたT町、即ち、「大きな日本での元祖であるといふ稻荷があつて、馬市には非常に賑やかであると知つてゐた」T町といふのは、仙臺から五里ほど南方の岩沼である。そして「Tといふ稻荷」といふのは、奥羽における稻荷神社の頭領といはれる竹駒神社である。

勿論、作者が實際に踏査したとはいつても、その全體の上に潤色と想像とが加へられてゐることはいふまでもないのだが、しかしまた、實地踏査の收穫とも見るべきものが歴々と指點される。主人公が桶屋の前に立つて、ぼんやりと見惚れてゐる一章（五十）や、稻荷の境内に入つて行つて、婆

さんの茶店で酒を飲んだりするところ(二十四)などは明らかにそれだといへる。いかにも鮮かな印象を残すところがある。

が、しかし、この作の作者の藝術生活における意義としては、わたしは作者が常に主張してゐた平面描寫が、この作において其極致に達したところに在るといひたいのである。例の作者のやゝ性急なところはあるが、ぐんぐんと強い力で、どこまでも平面的に、ひたおしに押し行つたところに此作の特色があるといひたいのである。しかも、作者が常に懐抱してゐた「自然の無關心」もまたいたるところに強調されて、思想的にも、人間の運命の人力をもつていかんともすることの出来ないといふところが、例の作者の感傷的な詠歎の氣持で描き抒べられてゐる。例へば、

「また日が暮れて行くのであつた。三日目の日が、人間の世の中にかういふ不安と罪惡とがあるのを少しも知らないやうな日が、穩かな靜かな日が、荷車の音と馬車の喇叭の音と美しい山々の深い碧とを背景にした日が。」(二十五)

などは其一つで、そしてこの書き方の上には、當時、作者自身も語つてゐたが、全體にゴックウルの影響が著るしく見えてゐるのである。

さて、作者は、この『一兵卒の銃殺』を公けにした年の九月に『ある僧の奇蹟』を發表し、十月から『残雪』を書きはじめた。これらの二作において、作者は明らかに自然主義を逸脱して宗教的、哲

學的の傾向をもつて來た、と私は嘗て言つたが、今もさう信じてゐる。

ところで、『再び草の野に』は、その翌年の大正七年十月、作者が四十八歳の秋から書きはじめて、十二月に脱稿し、翌年一月、やはり書きおろしをすぐに單行本として春陽堂から發行したものである。わたしは嘗て『残雪』以後の作者の心境を評して、「たとへば高い峠を越して平野に出たともいふやうに、再び藝術の世界に落着きはじめた」といつた。實に久しぶりで、作者に其本來の詩心が蘇つて來たのが、この『再び草の野に』となつて現はれたのだといつていいであらう。作者の氣持はたしかに悠揚としてゐる。

とらへたテーマは、はじめに野があつて、次に大きな文化の波の襲來のために忽ち繁華な人間の世界となつたが、やがてまた自然の推移のために元の野にかへつてしまつたといふところに、作者が儂い人生の營みを感じ、佗しい榮華の跡を偲び、更に此廢墟の前に立つて、自然の大きな顯現と無關心な循環との上に、しみじみと大きな眼を見張つて驚嘆するのである。

これはすでに明らかに全く「詩」の領域である。作者は恐らく初めから描き語らうとするよりも歌はうとするところに重きをおいて此題材に向つたのであらう。「その一」「その二」「その三」と三つに分けた構圖にも其意圖は窺はれる。従つて、この一篇には所謂筋といふべきものはない。一貫した人間生活は描かれてゐない。事件はしきりに簇出するが、それらの間には必ずしも連絡があるのではない

のである。ただ人生のいたるところに、常に起るところの雑多な現象が、この新らしく開かれた野の上にも忽ちにして起つたことを示してゐるだけである。而かも、作者はそれらを犇々と描いてゐながら、敢てそれらの事件の意義と成行とを語らうとはしてゐないのである。むしろさういふ現象の生滅して過ぎて行く人生の相と、そして其上に臨んでゐる自然の無關心な顯現とを、豫て用意してある埒塙の中に溶かし込んで、「詩」の効果を大にしようとしてゐるのである。

ところで、ここに取られた題材もまた實は現實にそのまま實在したことなのである。勿論、ここでは「詩」の効果を大ならしめんがために大いに誇張された傾きがないとはいへないけれども、しかも其本筋は少しも違はず、全くそのまゝに實在してゐたのである。それは今の東武線の終端驛が、曾て北武藏野の羽生にあつたのがもう一つ先きまで延びて、利根川の手前の土手下の茫々とした草野の中に川俣といふ驛がおかれ、後又、それが撤去された事なのである。實際、この停車場を中心としたあたりの發達は、一時まことに驚くべきほどにも目覺ましいものがあつた。わたしは、そのころ、一度、作者と共に羽生から線路を傳つてここまで歩いて、そして利根川の船橋を渡つて、作者の故郷である上州の館林まで行つたことがあるのでよく知つてゐる。

ところが、其後、鐵橋が利根川にかゝつて線路が先きへ延長されると、終端驛で可なり大きかつたこの停車場は、前後の停車場との距離の關係から全く撤回されて、同じ名の小さな停車場が川を渡つ

て十五六町も行つた向うの桑畑の中におかれたのである。そして其餘の事は何もかも一切がこの作中に書かれてある通りである。わたしも後に汽車でそこを通つて、この新らしい廢墟に對して無量の感慨を催さずにはゐられなかつたことがある。

さて、次には『河ぞひの春』だが、これは『やまと新聞』に連載されたもので、大正八年の四月に脱稿してゐる。『再び草の野に』においても、この世の雑多の現象はことごとく色戀の上から渦巻きあがつて來てゐるが、『河ぞひの春』ではそれが眞正面から人生の最大事となつてゐる。つくづく色戀の世の中だ。辛い色戀の世の中だ」といふところに、この作の基調がおかれてある。新聞小説といふところに多少の妥協があるかと感じられないこともないのであるが、といつて、いはゆる通俗までには決して墮してゐない。いやいや、『残雪』以後の傾向として、これにも多少の説法じみた饒舌は目につくけれども、思想的にはむしろ非常に深い、眞剣なものになつてゐる。いはゆる通俗的な色戀物などには斷じて見られない眞剣味があるのである。『残雪』以來の作者に見られる色戀道の行者の姿は、ここにも歴々としてまはつてゐるのである。いはば此作は色戀物の極北である。

なほ、またしてもくどいやうだが、ここに舞臺として取られてゐるところを序でにちよつと説明すると、これは作者の故郷である館林を中心とした利根川(T川)と渡良瀬川(W川)との間の上州平野の一帯で、女主人公がはじめ友達を尋ねて行つて、友達がるなかつたのに失望して停車場前の宿屋に

とまつたといふT町は即ち館林であり、昔の河港であつたといふA町は、その西南方三里ほどのところにある赤岩である。さすがに作者の熟知してゐるところだけに、上州平野の地方色は、人間の世の愛慾の展開と共に、まことに遺憾なく描き出されてゐるのである。(昭和十二年四月六日)

昭和十二年五月十日印刷
昭和十二年五月十五日發行

花袋全集第八卷
豫約價金壹圓八拾錢



不許複製

著作者 田山 錄 彌
東京市小石川區竹早町三十二番地
發行者 川 俣 馨 一
東京市豊島區巢鴨五丁目一〇八二番地
印刷者 矢 島 勇 三 郎

東京市小石川區竹早町三十二番地

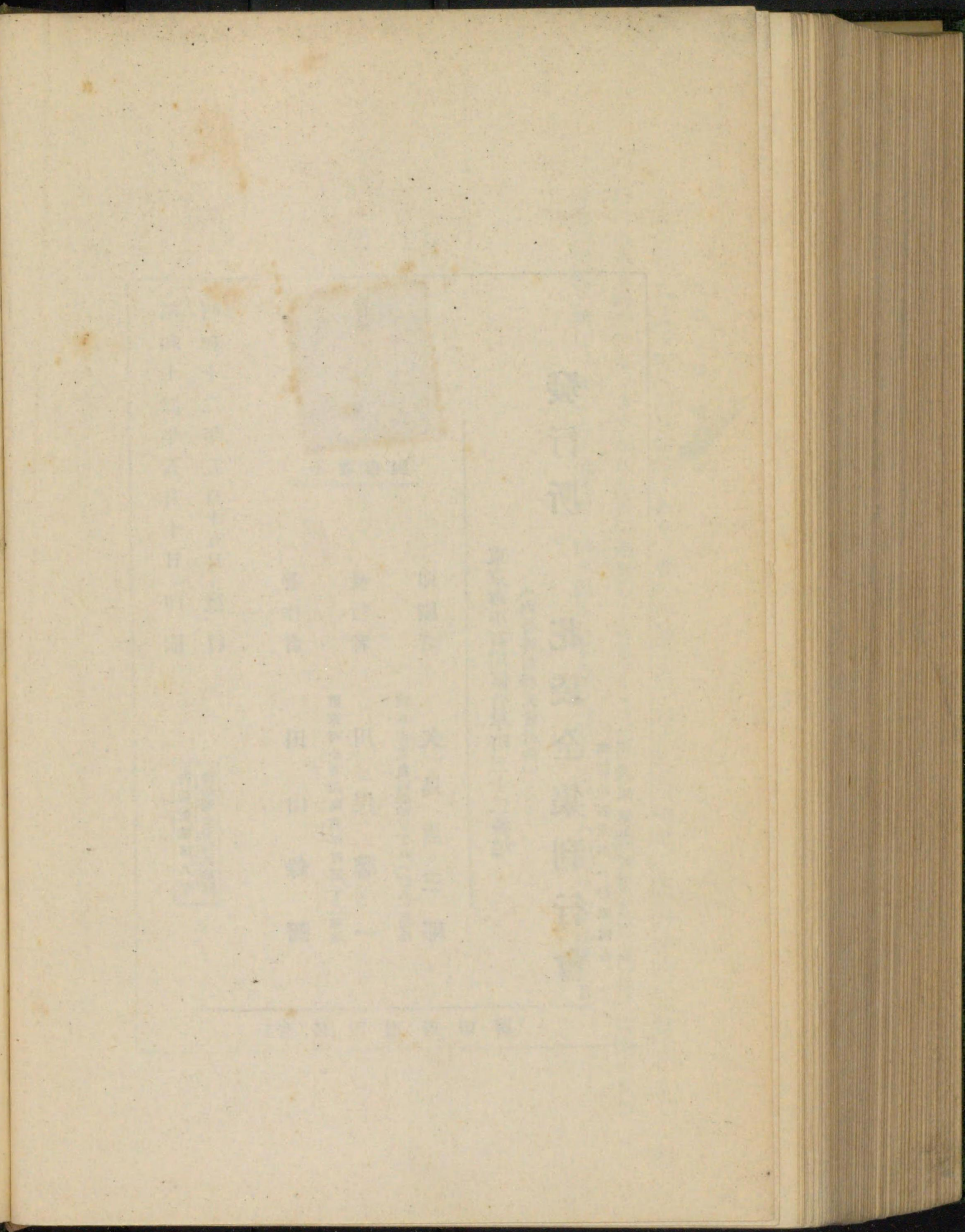
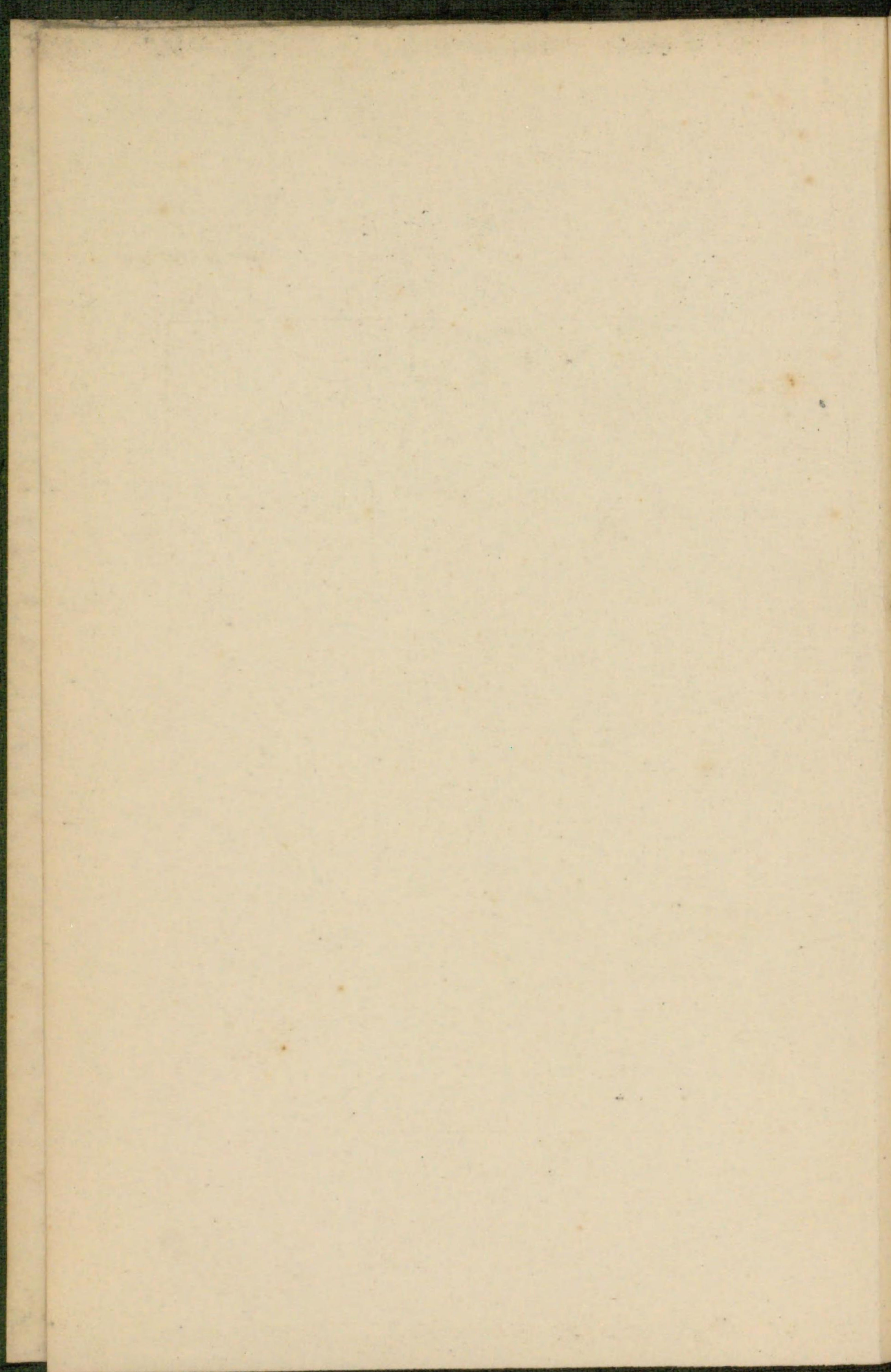
(内外書籍株式會社内)

發行所

花袋全集刊行會

電話小石川(86)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

(刷印所刷印島矢)



693
176

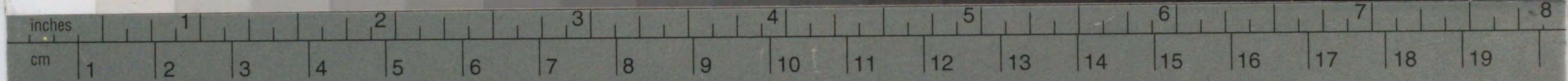


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

